

『朱子語類』卷一四〜一八訳注（五）

宇佐美文理・古勝亮・焦堃・中純夫・福谷彬

『朱子語類』卷一六「大学」三（1〜57条）

傳一章釋明明徳

1条

問克明德。曰。徳之明與不明、只在人之克與不克耳。克、只是眞箇會明其明德。 節

〔校勘〕

○「眞箇」万曆本、和刻本は「眞個」に作り、朝鮮古写本は「眞个」に作る。

〔訳〕

「よく徳を明らかにする」について質問する。おっしゃる。「徳が明

明らかであるのと明らかでないのは、ただ人がそれをできるかできないかということにかかっている。「克よくする」とは、本当にその明德を明らかにすることができるということである。」 甘節録

〔注〕

(1)「克明德」『大學章句』傳一章「康誥曰、克明德。」注「康誥、周書。克、能也。」

(2)「眞箇」ほんとうに。現代語の「真的」。『王摩詰文集』卷五「酬黎居士浙川作」「儂家眞箇去、公定隨儂否。」「語類」卷一四、一六六条、卷一五、一〇〇条などに既出。卷一五、一〇〇条「窮來窮去、末後自家眞箇見得此理是善與是惡、自心甘意肯不去做、此方是意誠。」

(3)「明其明德」『大學章句』經「大學之道、在明明徳、在親民、在止於至善。」注「明、明之也。明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但爲氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏。然其本體之明、則有未嘗息者。故學者當因其所發而遂明之、以復

其初也。」

〔参考〕

○本条は、眞徳秀『西山讀書記』卷二二に「問克明德。曰。徳之明與不明、只在人之克與不克。須是眞个會明其明德。」と引かれる。

2条

問明德明命。曰。便是天之所命謂性者。人皆有此明德、但爲物欲之所昏蔽、故暗塞爾。 啓

〔校勘〕

- 「便」 朝鮮整版本は「便」に作る。以下同じ。
- 「問明德明命」 朝鮮古写本は「問克明德天之明命」に作る。
- 「所昏蔽」 朝鮮古写本は「所昏」に作る。
- 「故暗塞爾」 朝鮮古写本は「故蔽塞爾」に作る。

〔訳〕

明德と明命について質問する。先生がおっしゃる。「これは、『中庸』の「天が命ずるものを性と性」ということである。人には皆、この明德が具わっているが、ただ、物欲に昏く蔽われてしまつて、暗く塞がれているだけなのである。」 黄營録

〔注〕

- (1)「明命」『大學章句』傳一章「大甲曰。顧諟天之明命。」
- (2)「天之所命謂性者」『中庸章句』第一章「天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教。」
- (3)「人皆有此明德、但爲物欲之所昏蔽、故暗塞爾」本卷一条、注(3)を参照。
- (4)「昏蔽」「くらくおおう」。既出。卷一四、七四条「或以明明徳譬之磨鏡。曰。鏡猶磨而後明。若人之明德、則未嘗不明。雖其昏蔽之極、而其善端之發、終不可絶。」『伊川易傳』益卦「上九、莫益之、或擊之、立心勿恒、凶。」注「利者、衆人所同欲也。專欲益己、其害大矣。欲之甚則昏蔽而忘義理、求之極則侵奪而致仇怨。」
- (5)「暗塞」「くらく塞ぐ」。周濂溪『通書』「誠下」「五常百行、非誠非也。邪暗塞也。」朱注「非誠、則五常百行、皆無其實。所謂不誠無物者也。靜而不正、故邪、動而不明不達、故暗且塞。」「闇塞」の語は、古くは、『論衡』「累害」に「夫不本累害所從生起、而徒歸責於被累害者、智不明、闇塞於理者也」と見える。

3条

自人受之、喚做明德、自天言之、喚做明命。今人多鶻鶻突突、一似

無這箇明命。若常見其在前、則凜凜然不敢放肆、見許多道理都在眼前。
又曰。人之明德、即天之明命。雖則是形骸間隔、然人之所以能視聽言動、非天而何。

問。苟日新、日日新。曰。這箇道理、未見得時、若無頭無面。如何下工夫。才別撥得有些通透處、便須急急躡蹤躡跡前去。

又曰。周雖舊邦、其命維新。文王能使天下無一民不新其德、即此便是天命之新。

又云。天視自我民視、天聽自我民聽。或問。此若有不同、如何。曰。天豈曾有耳目以視聽。只是自我民之視聽、便是天之視聽。如帝命文王、豈天諄諄然命之。只是文王要恁地、便是理合恁地、便是帝命之也。

又曰。若一件事、民人皆以爲是、便是天以爲是。若人民皆歸往之、便是天命之也。

又曰。此處甚微、故其理難看。 賀孫

〔校勘〕

○「這箇明命」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

○「這箇道理」 万曆本、和刻本は「箇」を「個」に作り、朝鮮古写本は「个」に作る。

○「才別撥」 成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「才」を「纔」に作る。

○「其命維新」 朝鮮古写本は「維」を「惟」に作る。

〔訳〕

「人が（天から）受けるという点からいえば、明德と呼び、天（が

人にあたえるということ）からいえば、明命とよぶ。今の人々は、多くはほんやりとして、この明命がないかのようである。いつもそれ（明德）を目の前に見ているようにすれば、おそれつつしんで、いい加減にしようとせず、多くの道理がすべて目の前に見える。」

またおっしゃる。「人の明德とは、天の明命のことである。人は肉体によって（天と）隔たった存在であるが、人が正しく視たり聴いたり喋ったり行動したりできるのは、天のお蔭でなくて何であろうか。」

「苟に日に新にせば、日日新たなり」について質問する。おっしゃる。「この道理は、まだ体得していないときは、とらえどころがない。どのように工夫すればよいか。えぐり出して、少しでも透徹する所があれば、（そこを手掛かりに）直ちに急いでその跡を追いかけていって、前に走って進みなさい。」

またおっしゃる。「『詩』に、「周は舊邦なりと雖も、その命はこれ新たなり」という。文王は、天下の人民に一人として徳を新しくさせないようなことはなかったのであり、つまりこれは天命があらたまつたことを言っているのである。」

またおっしゃる。「〔尚書〕にいう「天視るに我が民より視、天聽くに我が民より聽く」と。ある者が質問する。「もし天と人に違いがあれば、どうするのですか。」おっしゃる。「天がどうして耳や目によって視たり聴いたりすることがあるか。我が人民に従って視たり聴いたりするということが、天が視たり聴いたりするということである。たとえば、天帝が文王に命じたのは、どうして天が（実際に）ねんごろに文王に命じたということであろうか。文王がそのようにしよう」と

すれば、それはとりもなおさず理としてそのようにすべきだったのであり、それは天帝が命じたのである。」

またおっしゃる。「たとえばある一つの事があり、人々が皆正しいと思つたとすると、それは天が正しいとしたのである。もし人々がその人に付き従うなら、それはとりもなおさず天が命じたのである。」

またおっしゃる。「このところ（＝明明徳における天と人との関係）は微妙であるので、その理は理解するのが難しい。」葉賀孫録

〔注〕

(1) 「白人受之、喚做明德、自天言之、喚做明命」『尚書』「太甲」上、蔡沈集傳「在天爲明命、在人爲明德」。「喚」は、呼ぶ、言い表す。現代語「叫」。

(2) 「鶻突突」 「鶻突」は、「糊塗」に同じ。ほんやりしている様、頭脳がはつきりせず、愚かな様。卷一四（四二条、一二四条など）、卷一五に既出。卷六、八四條、周明作録（I 二七）「曰。敬非別是一事、常喚醒此心便是。人毎日只鶻突突過了、心都不曾收拾得在裏面。」卷一四、四二條「伊川舊日教人先看『大學』、那時未有解說、想也看得鶻突。而今看注解、覺大段分曉了、只在子細去看。」呉曾『能改齋漫錄』卷二「鶻突」 「鶻突」二字當糊塗。蓋以糊塗之義、取其不分曉也。按、呂原明家塾記云、太宗欲相呂正惠公。左右或曰。呂端之爲人糊塗。帝曰。端小事糊塗、大事不糊塗。決意相之。」(3) 「一似」「まるで…のようである」。既出。卷一五、七六條「未知得至時、一似捕龍蛇捉虎豹相似。」『孔子家語』「正論解」 「孔子適齊、

過泰山之側、有婦人哭於野者而哀。夫子式而聽之曰。此哀一似重有憂者。使子貢往問之。」

(4) 「若常見其在前」『尚書』「太甲」上「先王顧諟天之明命。」孔安國傳「顧、謂常目在之。」蔡沈集傳「顧、常目在之也。」

(5) 「凜凜然」おそれつつしむさま。『尚書』「泰誓」中「百姓懍懍、若崩厥角。」僞孔傳「言民畏紂之虐、危懼不安、若崩摧其角、無所容頭。」蔡沈集傳「商民畏紂之虐、懍懍若崩摧其頭角然、言人心危懼如此。」『語類』卷八三、二二八條、徐寓録（VI 2174）「如二程未出時、便有胡安定・孫泰山・石徂徠。他們說經雖是甚有疏略處、觀其推明治道、直是凜凜然可畏。」

(6) 「雖則…然…」 「雖則」は、「雖然」などと同じく、連用して「…ではあるが」という譲歩を表し、多く後句に転折の語をとまなう。太田辰夫『中国語歴史文法』（江南書院、一九五八年）三三三～三三四頁。

(7) 「形骸間隔」難解であるが、いま「人は肉体によって、天と隔たった存在である」と解す。『語類』卷二九、一三五條、葉賀孫録（II 151）にも同じ表現が見え、「又問。『集注』云、皆與物共者也、但有小大之差耳。曰。這道理只爲人不見得全體、所以都自狹小了。最患如此。聖人如何得恁地大。人都不見道理、形骸之隔、而物我判爲二」という。『文選』卷二五、盧子諒「答魏子悌」 「乖離令我感、悲欣使情傷。理以精神通、匪曰形骸隔。」注「善曰…、楚辭曰。衆人莫可與論道、非精神之不通。莊子曰。申徒、兀者也。謂子產曰。今與我遊於形骸之内、而子索我於形骸之外、不亦過乎。（所引は『莊

子』内篇「徳充符」]

- (8) 「視聽言動」『論語』「顔淵」「顔淵問仁。子曰。克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。顔淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。』『語類』卷一五、一四二条に既出。

- (9) 「苟日新、日日新」『大學章句』傳二章「湯之盤銘曰。苟日新、日日新、又日新。」注「盤、沐浴之盤也。銘、名其器以自警之辭也。苟、誠也。湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢。故銘其盤、言誠能一日有以滌其舊染之汗而自新、則當因其已新者、而日日新之、又日新之、不可畧有間斷也。」

- (10) 「無頭無面」「とらえどころがなく、正体がはっきりしない」の意。「無頭面」と同義。『語類』卷六七、一六一條、輔廣録(V 168)「或言某人近注『易』曰。縁『易』是一件無頭面底物、故人人各以其意思去解說得。』『論衡』「初稟」「天無頭面、眷顧如何。』『景德傳燈録』卷五・荷澤神會章「他日祖告衆曰。吾有一物、無頭無尾、無名無字、無背無面。諸人還識否。師乃出曰。是諸佛之本原、神會之佛性。」

- (11) 「才…便…」 「才」は「纔」に同じ。「少しでも…すれば…だ」。
- (12) 「別撥」 えぐりひらく。卷一四に既出。七七条「問明明徳。曰。人皆有个明處、但爲物欲所蔽、別撥去了、只就明處漸明將去。」卷二〇、一四二条、黄榦録(II 481)「曰。謝氏此一段如亂絲、須逐一別撥得言語異同、巧言字如何不同、又須見得有箇總會處。』『河南程氏遺書』卷二上(37)「講學本不消得理會、然每與別撥出、

只是如今雜亂膠固、須著說破。」

- (13) 「通透」 すっかりわかること。既出。卷一四、四八条、注(5) 参照。『河南程氏遺書』卷一七(18)「如眼前諸人、要特立獨行、煞不難得只是要一箇知見難。人只被這箇知見不通透。』『祖堂集』卷一九、香嚴和尚章「師爲衆曰。此世界日月短促、則須急急底事了却去。平治如許多不如意事、直須如地相似。安然不動、一切殊勝境不隨轉、只摩尋常、不用造作、獨脫現前、不帶伴侶。皎然秋月明、内外通透。尅念寸陰、直須此生了却。今生不了、阿誰替代。」
- (14) 「躡蹤」 追いかける、跡をたどる。「躡迹」、「躡踵」などに同じ。
- (15) 「趨鄉前去」 「趨」は、急いで進むこと、走ること。卷八、五四条、寶從周録(I 136)「工夫要趨、期限要寬。」卷一〇、四九条、徐寓録(I 167)「讀書、且就那一段本文意上看、不必又生枝節。看一段、須反覆看來看去、要十分爛熟、方見意味、方快活、令人都不愛去看別段、始得。人多是向前趨去、不會向後反覆、只要去看明日未讀底、不會去紬繹前日已讀底。』「郷」は、「向」と同じく、方向を示す介詞。

- (16) 「周雖舊邦、其命維新…」 『大學』引「詩」大雅・文王。注「詩大雅文王之篇。言周國雖舊、至於文王、能新其徳、以及於民、而始受天命也。」卷一四、一一九条に既出。「明明徳、便要如湯之日新。新民、便要如文王之周雖舊邦、其命維新。各求止於至善之地而後止也。」

- (17) 「天視自我民視、天聽自我民聽」 『尚書』「泰誓」中「天視自我民視、天聽自我民聽。』『孟子』「萬章」上「太誓曰「天視自我民視、天

聽自我民聽、此之謂也。」集注「自、從也。天無形、其視聽、皆從於民之視聽。民之歸舜如此、則天與之可知矣。」

(18) 「文王要恁地」「文王がそのようにしようとする」。「要」は、「…しようとする」意。「《要》」じたいが必要あるいは意欲をあらわす補助詞としての用法は唐代ごろからみえる(太田前掲書、二〇〇頁)。

(19) 「歸往」『穀梁傳』莊公三年「尊者取尊稱焉、卑者取卑稱焉。其曰王者、民之所歸往也。」「語類」卷二三、五条、董銖錄(II 533)「蓋政者、所以正人之不正、豈無所作爲。但人所以歸往、乃以其德耳。故不待作爲而天下歸之、如衆星之拱北極也。」

(20) 「難看」「理解するのが難しい」。既出。卷一四、四五条(125)「問中庸解。曰。此書難看。」

4条

顧諟天之明命。諛、是詳審。顧諟、見得子細。 侷

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

「天の明命を顧諟す」。「諛」とは、つまびらかにするという意。「顧諟」とは、子細に認識するという意味である。 沈侷録

〔注〕

(1) 「顧諟天之明命」『大學章句』傳一章「大甲曰。顧諟天之明命。」注「大、讀作泰。諛、古是字。大甲、商書。顧、謂常目在之也。諛、猶此也、或曰審也。天之明命、即天之所以與我、而我之所以爲德者也。常目在之、則無時不明矣。」

(2) 「諛是詳審」「諛は審なり」とする訓詁は、朱注にも「諛、…或曰審也」といつており、古くは、『玉篇』に「諛、審也、諦也」と見える。「詳審」の語は既出。卷一四、一五〇条「慮、是思之重復詳審者。」「論衡」「問孔」「夫賢聖下筆造文、用意詳審。」

(3) 「顧諟、見得子細」『大學』の「顧諟天之明命」は、朱子の注に従えば、「諛の天の明命を顧みる」と訓ずるはずであるが、ここでは「諛、…或曰審也」の訓詁に従い、「顧諟」を連文として「詳細に認識する」と解している。

5条

顧諟天之明命、只是照管得那本明底物事在。 燾

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一六は、本条を収めず。

〔訳〕

「諛の天の明命を顧みる」とは、ただ、あの本来的に明るいもの（明德）をしつかりとコントロールするだけである。 呂夬録

6条

〔注〕

顧諛天之明命、便是常見這物事、不教昏著。今看大學、亦要識此意。所謂顧諛天之明命、無他、求其放心而已。 方子 佐同

〔1〕「照管」「世話をする」、「注意を払う」、「管理する」の意。卷一四、一五に既出。卷一四、一八条「大學總說了、又逐段更說許多道理。聖賢怕有些子照管不到、節節覺察將去、到這裏有恁地病、

〔校勘〕

○朝鮮古写本は異同が多く、本条を「顧諛天之明命、盖嘗見得、不教昏著、常如有見、便孟子所謂求放心也」に作る。

到那裏有恁地病。」卷一五、一四五条「聖人亦是略分箇先後與人知、不是做一件淨盡無餘、方做一件。若如此做、何時得成。又如喜怒上做工夫、固是。然亦須事事照管、不可專於喜怒。」

○「昏著」成化本、万曆本、和刻本は「著」を「着」に作る。
○「方子 佐同」朝鮮古写本は「方子」に作る。

〔2〕「那本明底物事」「あの本来的に明るいもの」、すなわち明德。

〔訳〕

「諛の天の明命を顧みる」とは、常にこのもの（明德）を見て、昏迷させないようにするということである。いま『大學』を読む際に、やはりこのことを知るべきである。いわゆる「諛の天の明命を顧みる」とは、『孟子』の「（學問の道は）他無し、其の放心を求むるのみ」ということである。 李方子録 蕭佐録同じ

卷一四に既出。八二条「曾興宗問。如何是明明德。曰。明德是自家心中具許多道理在這裏。本是个明底物事、初無暗昧、人得之則爲德。如惻隱・羞惡・辭讓・是非、是從自家心裏出來、觸著那物、便是那个物出來、何嘗不明。緣爲物欲所蔽、故其明易昏。如鏡本明、被外物點汗、則不明了。少間磨起、則其明又能照物。」朱子に先だつものとして、程伊川に次のものが見える。『河南程氏遺書』

〔注〕

〔1〕「常見這物事、不教昏著」本卷四条、注（1）を参照。卷一四、七三条「在明明德。須是自家見得這物事光明燦爛、常在目前、始得。」同、注（1）を参照。

卷一八「問。人性本明、因何有蔽。曰。此須索理會也。孟子言人性善是也。雖荀・楊亦不知性。孟子所以獨出諸儒者、以能明性也。性無不善、而有不善者、才也。性即是理、理則自堯舜至於塗人一也。才稟於氣、氣有清濁。稟其清者爲賢、稟其濁者爲愚。」

〔2〕「今看大學、亦要識此意……」

「今看」以下の部分、『語類』卷六

にも同文が見える。八二条、李方子録・董拱壽録（I 113）「學者須是求仁。所謂求仁者、不放心。聖人亦只教人求仁。蓋仁義禮智四者、仁足以包之。若是存得仁、自然頭頭做着、不用逐事安排。故曰。苟志於仁矣、無惡也。今看『大學』、亦要識此意、所謂「顧諟天之明命」、「無他、求其放心而已」。卷六では、五常を総括するものとしての「仁」と「放心」との関係について説明する際に、「大學」の当該箇所を引用するために、「今看『大學』、亦要識此意」といつており、文意が通じるが、本条は、そもそも「大學」の「顧諟天之明命」を論じており、文意が不自然である。よって、この部分は、卷六の議論が混入した可能性がある。むしろ、この部分を含まない朝鮮古写本が文意がすっきりしている。

(3) 「無他、求其放心而已」 『孟子』「告子」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」集注「學問之事、固非一端、然其道則在於求其放心而已。蓋能如是則志氣清明、義理昭著、而可以上達。不然則昏昧放逸、雖曰從事於學、而終不能有所發明矣。」

(4) 「昏著」「著」は状態を表す助字。

7条

先生問。顧諟天之明命、如何看。答云。天之明命、是天之所以命我、而我之所以爲德者也。然天之所以與我者、雖曰至善、苟不能常提撕省察、使大用全體昭晰無遺、則人欲益滋、天理益昏、而無以有諸己矣。曰。此便是至善。但今人無事時、又却昏昏地、至有事時、則又隨事逐物

而去、都無一箇主宰。這須是常加省察、眞如見一箇物事在裏、不要昏濁了他、則無事時自然凝定、有事時隨理而處、無有不當。道夫

〔校勘〕

○「曰此便是至善」朝鮮古写本は「曰」を「先生曰」に作る。

○「一箇主宰」「箇」を万曆本、和刻本は「個」に、朝鮮古写本は「个」に作る。

○「眞如見一箇物事」「箇」を万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。

○「在裏」万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「無有不當」朝鮮古写本はこれに続けて「又云古註說常自在之這說得極好」の十四字あり。

〔訳〕

先生が質問する。「『諟の天の明命を顧みる』をどのように理解するか。」答えていう。「天の明命とは、天が私に命じたところのものであり、私が徳としているものでもあります。しかし、天が私に与えたものは、至善であるといっても、もしも、いつも覚醒させ省察して、偉大なる作用と完全なる本体をはっきりとさせ、遺漏がないようにしなければ、人欲はますます増大し、天理はますます昏迷し、これ（明德）を自己に備えるということがなくなってしまう。おっしゃる。「これ（明德）はつまり至善なのである。しかし、今の人は、何もなければ、あのようにぼうつとして、何かあると、事や物を追いかけていくが、そ

れでは) 自己を統一する主宰者がまったく存在しない。つねに省察を加え、ほんとうに一つのもの(明德)をここにしっかりと見て、それを昏く濁らせないようにすれば、何もなければ自然にじつと動じなくなり、何かある時には理に従って処理し、適切でないことはない。」
楊道夫録

〔注〕

(1) 「天之明命、是天之所以命我、而我之所以爲德者也」本巻四条注(1)を参照。

(2) 「提撕」「覚醒させる」。巻一四、六八条、七二条、一〇七条、巻一五、五二条に既出。『顔氏家訓』「序致」「吾今所以復爲此者、非敢軌物範世也、業以整齊門内、提撕子孫。」「祖堂集」巻一〇、玄沙和尚章「志超上座爲衆乞茶去時、問師。伏乞和尚提撕。師云。只是你不可更教我提撕。進曰。乞師直指。志超不是愚癡人。」

(3) 「省察」巻一五、九二条、一二六条に既出。『中庸章句』右第一章。子思述所傳之意以立言。首明道之本原出於天而不可易、其實體備於己而不可離、次言存養省察之要、終言聖神功化之極。」

(4) 「大用全體」「偉大なる作用と完全なる本体」。「全體大用」と同義。『全體大用』は既出。巻一四、七四条「或以明明德譬之磨鏡。曰。鏡猶磨而後明。若人之明德、則未嘗不明。雖其昏蔽之極、而其善端之發、終不可絶。但當於其所發之端、而接續光明之、令其不昧、則其全體大用可以盡明。」同条の注(4)を参照。

(5) 「昭晰」明らかではっきりしているさま。『風俗通義』「故易紀

三皇、書叙唐虞、惟天爲大、唯堯則之。巍巍其有成功、煥乎其有文章。自是以來、載籍昭哲。」

(6) 「有諸己」「これを己に有す」。『大學章句』傳九章「堯舜帥天下以仁、而民從之。桀紂帥天下以暴、而民從之。其所令反其所好、而民不從。是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人。」注「有善於己、然後可以責人之善。無惡於己、然後可以正人之惡。皆推己以及人、所謂恕也。」「孟子」「盡心」下「浩生不害問曰。樂正子何人也。孟子曰。善人也、信人也。何謂善、何謂信。曰。可欲之謂善、有諸己之謂信、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神。樂正子、二之中、四之下也。」

(7) 「昏昏地」「昏昏」は、暗いさま、ぼうっとしているさま。『孟子』「盡心」下「孟子曰。賢者以其昭昭、使人昭昭。今以其昏昏、使人昭昭。」「地」は、副詞的修飾語としての助字。この語法は、唐代から用いられるが(暗地、「慕地」など)、形容詞AA型重複型式に用いられるものは、宋代からである。詳しくは、太田前掲書三五一〜三五三頁。

(8) 「隨事逐物」「事や物を追いかける」。『語類』巻一一八、八一条、沈憫録(V 2858)「伯量問。南軒所謂「敬者、通貫動靜内外而言、泳嘗驗之、反見得靜時工夫少、動時工夫多、少間隨事逐物去了。曰。隨事逐物、也莫管他。有事來時、須著應他、也只得隨他去。只是事過了、自家依舊來這裏坐、所謂「動亦敬、靜亦敬」也。」

(9) 「主宰」「全体を統一する者」。三浦國雄『朱子語類』抄一四三頁を参照。巻一五に既出。五二条「人之一心、本自光明。

常提撕他起、莫爲物欲所蔽、便將這箇做本領、然後去格物致知。

…但只要自家常醒得他做主宰、出乎萬物之上、物來便應。」同条、

注(12)を参照。

- (10)「在裏」「在裏」の二字は、近世漢語においては、「ここに」という実義が虚化して、動作の強調の語氣を表す語助詞として多く用いられる。太田前掲書三八〇頁「近世では、『在裏』『在此』『在這裏』などを句末に用いることがある。これらは動作のおこなわれる場所をいわんとするものではなく、むしろ、動作の存在をいうものであると認むべきである」。また、句末の助詞の「在」の用法については、入矢義高「禪語つれづれ」(『求道と悦楽』、岩波書店、一九八三年、一四九―一五五頁)、『講座禪・第六卷・禪の古典―中国―』(筑摩書房、一九六八年)月報「禪語つれづれ(六)」に初出)に詳しい。「このような〈句終詞〉の「在」には、それ自体の語義は全くないのであって、肯定にせよ否定にせよ、そのセンテンス全体に断言的な語調を添えるだけの、いわゆる強辞であるにすぎない。」(一五〇頁)ただし、本条の「常加省察、眞如見一箇物事、不要昏濁了他」は、本卷六条の「常見這物事、不教昏著」と同一内容と捉え、「ここに」という実義を含むものとして理解する。
- (11)「凝定」既出。卷一四、一二八条「定亦自有淺深。如學者思慮凝定、亦是定。如道理都見得徹、各止其所、亦是定。只此地位已高。」同条、注(1)を参照。

8条

顧諱天之明命、古註云常目在之、說得極好。非謂有一物常在目前可見也、只是長存此心、知得有這道理光明不昧。方其靜坐未接物也、此理固湛然清明、及其遇事而應接也、此理亦隨處發見。只要人常提撕省察、念念不忘、存養久之、則是理愈明、雖欲忘之、而不可得矣。孟子曰。學問之道無他、求其放心而已矣、所謂求放心、只常存此心、便是。存養既久、自然信向、決知堯舜之可爲、聖賢之可學、如菽粟之必飽、布帛之必煖、自然不爲外物所勝。若是若存若亡、如何會信、如何能必行。又曰。千書萬書、只是教人求放心。聖賢教人、其要處皆一。苟通得一處、則觸處皆通矣。 儻

〔校勘〕

- 「古註云常目在之說得極好」朝鮮古写本は「古註云顧諱常目在之也此語說得極好」に作る。
- 「非謂有一物常在目前可見」朝鮮古写本は「非謂」を双行小字に作る。

〔訳〕

「諱の天の明命を顧みる」について、古注に、「顧」とは「常に眼差しをそこにおいておく」というのが、とてもうまく解釈している。これは、ある一つの物が常に目の前にあって見えるということではなく、この心を長く存するという事にほかならず、この道理が光り輝

いて暗くならないことを知るのである。静坐して物に接していない時は、この理はもとよりひっそりと清らかで明るく、また物事が起こって、それに応じている時も、この理は、やはり至るところに現れるのである。常に覚醒させて省察し、一瞬も忘れないようにして、ながく存養しさえすれば、この理はますます明かになり、これを忘れようと思っても、忘れることができなくなる。『孟子』に、「学問の道は、他でもなく、この放心を求めぬのみだ」というが、「放心を求めぬ」とは、この（明徳の）心を常に存するというところにほかならない。存養することが久しければ、自然に（聖賢の道に）信をもつて向かい、堯舜になることもでき、聖賢（の道）も学ぶことができるということは、菽（まめ）や粟が充分にあれば腹が一杯になり、布帛が充分にあれば暖かくなるよう（に明白）なものであるということがはっきりとわかれば、自然と外的なものに負けないようになる。もし（この理が）あるのかないのかはつきりしない状態であれば、どのように信じ、どのようにしっかりと行動することができようか。

またおっしゃる。「あらゆる書物に述べることは、人に放心を求めさせるだけだ。聖賢が人を教育するのに、その要点はただ一つである。もしもこの一つに通ずれば、あらゆる所に通ずる。」沈憫録

〔注〕

（1）「古註云常目在之」『尚書』「太甲」上「伊尹作書曰。先王顧諟天之明命、以承上下神祇。」孔傳「顧、謂常目在之。諟、是也。言敬奉天命以承順天地。」疏「正義曰。說文云、顧、還視也。諟

與是、古今之字異。故變文爲是也。言先王每有所行、必還迴視是天之明命。謂常目在之、言其想象如目前、終常敬奉天命、以承上天下地之神祇也。」孔穎達の疏は、「常に目するに之に在り」とは、（天の明命）を目の前にあるように想像すること」としており、本条において朱子が「（実際に）一つのものが常に目の前にあって見えるといっているのではない」という解釈と軌を一にする。

（2）「長存此心」『中庸章句』第二十七章「故君子尊徳性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸。温故而知新、敦厚以崇禮。」注「尊者、恭敬奉持之意。徳性者、吾所受於天之正理。道、由也。温、猶焯温之温、謂故學之矣、復時習之也。敦、加厚也。尊徳性、所以存心而極乎道體之大也。道問學、所以致知而盡乎道體之細也。二者、修徳凝道之大端也。不以一毫私意自蔽、不以一毫私欲自累、涵泳乎其所已知、敦篤乎其所已能、此皆存心之屬也。」

（3）「光明」卷一四、卷一五の「明徳」に關する条に多数既出。

（4）「接物」「應接」「應事接物」は、卷一四、一一一条、卷一五、一三二条に既出。

（5）「湛然清明」「水をたたえたようにひっそりとして、清らかで明るい。」「語類」卷五、七六条、程端蒙録（I 56）「心之全體、湛然虚明、萬理具足、無一毫私欲之間。」「孟子」「告子」上「其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也、且且而伐之、可以爲美乎。其日夜之所息、平旦之氣、其好惡與人相近也者幾希、則其旦晝之所爲、有梏亡之矣。梏之反覆、則其夜氣不足以存。夜氣不足以存、則其違禽獸不遠矣。人見其禽獸也、而以爲未嘗有才焉者、是豈人之情

也哉。」集注「良心者、本然之善心、即所謂仁義之心也。平旦之氣、謂未與物接之時、清明之氣也。好惡與人相近、言得人心之所同然也。幾希、不多也。梏、械也。反覆、展轉也。言人之良心雖已放失、然其日夜之間、亦必有所生長。故平旦未與物接、其氣清明之際、良心猶必有發見者。」

(6) 「只要…則…」 「…しさえすれば…だ」。

(7) 「念念不忘」 「一瞬も忘れない」 『論語』 「爲政」 「子曰。吾十有五而志于學」 集注「古者、十五而入大學。心之所之謂之志。此所謂學、即大學之道也。志乎此、則念念在此而爲之不厭矣。」 『語類』 卷二三、一〇一条、李季札錄 (II 235) 「十五志學一章、全在志于學上、當思自家是志於學與否、學是學箇甚。如此存心念念不放、自然有所得也。」 『論語』 「衛靈公」 「子張問行。子曰。言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。」 集注「其者、指忠信篤敬而言。參、讀如母往參焉之參、言與我相參也。衡、輓也。言其於忠信篤敬念念不忘、隨其所在、常有有見、雖欲頃刻離之而不可得。」 「念念」の語は、仏教語に由来し、本来「念」には、1、「刹那」、すなわち極めて短い時間、2、心のわずかなはたらき、の二つの系統の意味がある。1の意としては、例えば、『文殊師利問經』卷一「念念生滅者、一切諸行念念生、生者必滅、此謂一切諸法念念生滅」(大正一四、四九八下) などというものであり、2の意としては、智顛の「一念三千」(一念に三千世間が具わっていること)、すなわち『摩訶止觀』卷五「夫一心具十法界、

一法界又具十法界百法界、一界具三十種世間、百法界即具三千種世間、此三千在一念心」(大正四六、五四上) などがある。漢語として熟して用いられるようになると、両者の意味は結合していったようであり、例えば、北周の『無上秘要』卷五に、「志學之士、當知人身之中、自有三萬六千神。…日日存之、時時相續、念念不忘、長生不死。不能長存、八節勿替。能念身神、康強無病」と見える。

(8) 「存養」 『中庸章句』 「右第一章。子思述所傳之意以立言。首明道之本原出於天而不可易、其實體備於己而不可離、次言存養省察之要、終言聖神功化之極。」 『孟子』 「盡心」上「孟子曰。盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。」

(9) 「信向」 「信をもって心をよせる」 『語類』 卷二〇、四七条、林夔孫錄 (II 261) 『或問』 謂朋來講習之樂爲樂。曰。不似伊川說得大。蓋此箇道理天下所公共、我獨曉之、而人曉不得、也自悶人。若「有朋自遠方來」、則信向者衆、故可樂。」 『論衡』 「量知」 「是醫無方術、以心意治病也、百姓安肯信嚮、而人君任用使之乎。」

(10) 「堯舜之可爲」 「堯や舜にもなることができる」 『孟子』 「告子」下「曹交問曰。人皆可以爲堯舜、有諸。孟子曰。然。」 集注「人皆可以爲堯舜、疑古語、或孟子所嘗言也。」

(11) 「聖賢之可學」 「聖賢も学ぶことができる」 周濂溪『通書』 「聖學」 「聖可學乎。曰。可。有要乎。曰。有。請聞焉。曰。一爲要。一者無欲也。無欲則靜虛動直。靜虛則明、明則通。動直則公、公則溥。明通公溥、庶矣乎。」

(12) 「菽粟之必飽、布帛之必煖」 『孟子』 「盡心」下「孟子曰。有布

縷之征、粟米之征、力役之征。君子用其一、緩其二。用其二而民有殍、用其三而父子離。」集注「征賦之法、歲有常數。然布縷取之於夏、粟米取之於秋、力役取之於冬、當各以其時。若并取之、則民力有所不堪矣。」同「盡心」上「聖人治天下、使有菽粟如水火。菽粟如水火、而民焉有不仁者乎。」集注「水火、民之所急、宜其愛之而反不愛者多故也。尹氏曰。言禮義生於富足、民無常產、則無常心矣。」『管子』「重令」「菽粟不足、末生不禁、民必有飢餓之色、而工以雕文刻鏤相釋也、謂之逆。布帛不足、衣服母度、民必有凍寒之傷、而女以美衣錦繡綦組相釋也、謂之逆。」

(13) 「外物所勝」「外物」は、卷一四、八〇条、八二条、一三二条、一三六条に既出。一三二条「問章句云外物不能搖故靜。」『孟子』「告子」上「曰。耳目之官不思、而蔽於物、物交物、則引之而已矣。心之官則思、思則得之、不思則不得也。此天之所與我者、先立乎其大者、則其小者弗能奪也。此爲大人而已矣。」集注「官之爲言司也。耳司聽、目司視、各有所職而不能思、是以蔽於外物。既不能思而蔽於外物、則亦一物而已。又以外物交於此物、其引之而去不難矣。心則能思、而以思爲職。凡事物之來、心得其職、則得其理、而物不能蔽。失其職、則不得其理、而物來蔽之。」

(14) 「若存若亡」 あつたりなかつたり。あるのかないのかはつきりしない。『老子』第四章「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑不足以爲道。」『語類』卷一八、四六条、蕭佐録(Ⅱ 40)「誠意不立、如何能格物。所謂立誠意者、只是要著實下工夫、不要若存若亡。」卷六一、四三条、金

去僞録(Ⅳ 1468)「問。可欲之謂善至聖而不可知之謂神。曰。善、渾全底好人、無可惡之惡、有可喜可欲之善。「有諸己之謂信」、眞箇有此善。若不有諸己、則若存若亡、不可謂之信。」

(15) 「如何會信、如何能必行」 『易』序卦傳「有其信者必行之。」

(16) 「千書萬書、只是教人求放心。聖賢教人、其要處皆一」 『孟子』「告子」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」集注「：故程子曰。聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心約之、使反復入身來、自能尋向上去、下學而上達也。此乃孟子開示切要之言、程子又發明之、曲盡其指、學者宜服膺而勿失也。」貫休『禪月集』卷五「寄大願和尚」「峴首故人清信在、千書萬書取不諧。」

9条

問。顧諟天之明命、言常目在之、如何。曰。顧諟、是看此也。目在、是如目存之、常知得有此理、不是親眼看。立則見其參於前、在輿則見其倚於衡、便是這模樣。只要常常提撕在這裏、莫使他昏昧了。子常見得孝、父常見得慈、與國人交常見得信。 寓

〔校勘〕

- 「是如目存之」 朝鮮古写本は「是如」を双行小字に作る。
- 「立則見其」 朝鮮古写本は「則見」を双行小字に作る。
- 「在這裏」 万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「禹」朝鮮古写本は下に「淳録同」の三字あり。

〔訳〕

質問する。「諛の天の明命を顧みる」について、古注に「常に目するに之に在り」というのは、どういうことでしょうか。」おっしゃる。「顧諛」とは、これを見るということである。「目在」とは、目とそこにおいておくということ、常にこの理（明命）があることを知ることということであり、実際に自分の目で見ることではない。（『論語』にいう）「立ちては則ち其の前に參するを見、輿に在りては則ち其の衡に倚るを見る」というのが、このイメージである。ひたすら常に（明命を）しっかりと覚醒させて、それを昏迷させてはならない。子は常に孝を認識し、父は常に慈を認識し、人民と交わる時には常に信を認識する（というのは、しっかりと明命を覚醒させている状態である）。徐禹録

〔注〕

（1）「親眼」自分の眼で。

（2）「立則見其參於前、在輿則見其倚於衡」「立っている時には、それ（忠信と篤敬）が目の前に常にあるように見て、輿に乗っている時は、それが輓によりかかっているように思う。」「論語」「衛靈公」「子張問行。子曰。言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見

其倚於衡也。夫然後行。」集注「其者、指忠信篤敬而言。參、讀如毋往參焉之參、言與我相參也。衡、輓也。言其於忠信篤敬、念念不忘、隨其所在、常若有見、雖欲頃刻離之而不可得。然後一言一行、自然不離於忠信篤敬、而蠻貊可行也。」

（3）「模様」かたち、すがた、様子。卷一四、一六条、五五条に既出。『南齊書』卷五七、魏虜傳「羣臣瞻見模様、莫不僉然欲速造、朕以寡昧、亦思造盛禮。」

（4）「只要」「只要」は、「ただ…しさえすれば」と限定を表し、後句にそれを承ける型式が多いが、ここでは単用で「ひたすら…する」。

（5）「在這裏」三字で動作の強調を表す。本卷七条の注（1）を参照。

（6）「子常見得孝、父常見得慈、與國人交常見得信」『大學章句』傳三章「詩云。穆穆文王、於、緝熙敬止。爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。」注「詩」文王之篇。穆穆、深遠之意。於、歎美辭。緝、繼續也。熙、光明也。敬止、言其無不敬而安所止也。引此而言聖人之止無非至善。」

10条

問。顧、謂常目在之。天命至微、恐不可目在之、想只是顧其發見處。曰。只是見得長長地在面前模様。立則見其參於前、在輿則見其倚於衡、豈是有物可見。義剛

〔校勘〕
○諸本異同なし。

〔訳〕

質問する。「顧」とは、常に眼差しをそこにおいておくということですが、天命はあまりにも微かで、それを見ることはできないでしょうが、思うに、そのあらわれたところを見るといいことですね。」おっしゃる。「ただ常に面前に（明命の）イメージを認識するということである。（『論語』にいう）「立ちては則ち其の前に參するを見、興に在りては則ち其の衡に倚るを見る」とは、どうして（実際に）目に見えるものがそこにあるか（忠信や篤敬というものが実際に目に見えるようか）。」黄義剛録

〔注〕

- 〔1〕「天命至微」 韓愈『論語筆解』「爲政」「子曰。吾五十而知天命。（双行小注）孔曰。知天命之終始。」 韓曰。天命深微至蹟、非原始要終一端而已。仲尼五十學易、窮理盡性、以至於命、故曰知天命。」胡宏『五峰集』卷二「與彪德美」「天命至微、自非亞聖大賢、孰敢便爲已貫通。」
- 〔2〕「長長地」「常常地」に同じ。卷一四、二〇条に既出。
- 〔3〕「發見」あらわれること。卷一四、一五に既出。

11条

問。常目在之意。先生以手指曰。如一件物在此、惟恐人偷去、兩眼常常覷在此相似。 友仁

〔校勘〕

○「問。常目在之意。」朝鮮古写本は「問。顧諟天之明命、章句言顧謂常目在之也。未明常目在之意。」とする。

○「惟恐人偷去」朝鮮古写本は「惟恐人偷將去」に作る。

〔訳〕

「常に目すること之に在り」の意味について質問した。先生は手で指し示して仰った。「ちょうど、一つの物がここにあつて、人が盗み去るのでは、と心配して、両目の視線が常にそこへ注がれているというのと同じことだ。」郭友仁録

〔注〕

- 〔1〕「常目在」『書經』周書「太甲」上「先王顧諟天之明命。」孔安国伝「顧、謂常目在之。」「大学章句」伝一章「大甲曰。顧諟天之明命。」朱注「顧、謂常目在之也。」
- 〔2〕「如：相似」「ちようど：のようだ」の意。『語類』卷六、一二七条、曾祖道録（I 120）「義如利刀相似、都割斷了許多牽絆。」
- 〔3〕「一件」「件」は事柄や物を数える量詞。
- 〔4〕「偷去」「盗み去る」の意。『語類』卷二二、七条、沈僴録（Ⅶ

2919) 「如自家有一大光明寶藏、被人偷將去、此心還肯放捨否。」

12条

問。如何目在之。曰。常在視瞻之間、蓋言存之而不忘。 禹

〔校勘〕

○「問。如何目在之。」朝鮮古写本は「問。顧諟天之明命、顧如何是目在之。」と作る。

○「蓋言存之」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」字を「盖」に作る。

〔訳〕

質問。「『目すること之に在り』とはどういうことでしょうか。」先生「常にじっと見ているということ、『之を存して忘れず』のことを言っているのだろう。」徐禹録

〔注〕

(1)「視瞻」じっと見るの意。『禮記』「曲禮」上「將入戸、視必下。入戸奉扁、視瞻毋回。」

(2)「存之而不忘」『孟子』「離婁」下「孟子曰。君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心、以禮存心。」朱注「以仁禮存心、言以是存於心而不忘也。」

13条

因説天之明命曰。這箇物事、即是氣、便有許多道理在裏。人物之生、都是先有這箇物事、便是天當初分付底。既有這物事、方始具是形以生、便有皮包裹在裏。若有這箇、無這皮殼、亦無所包裹。如草木之生、亦是箇生意了、便會生出芽蘗、芽蘗出來、便有皮包裹著。而今儒者只是理會這箇、要得順性命之理。佛、老也只是理會這箇物事。老氏便要常把住這氣、不肯與他散、便會長生久視。長生久視也未見得、只是做得到、也便未會死。佛氏也只是見箇物事、便放得下、所以死生禍福都不動。只是他去作弄了。

又曰。各正性命、保合太和、聖人於乾卦發此兩句、最好。人之所以爲人、物之所以爲物、都是正箇性命。保合得箇和氣、性命便是當初合下分付底。保合、便是有箇皮殼包裹在裏。如人以刀破其腹、此箇物事便散、却便死。 夔孫

〔校勘〕

○「這箇物事」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。

○「便有許多道理在裏」万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。以下同じ。

○「便有皮包裹著」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「不肯與他散」朝鮮古写本は「與」を「得」に作る。

○「保合太和」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「保合大和」に作る。

〔訳〕

「天の明命」の話が出た折に先生が仰った。「これ（天の明命）は、気であって、多くの道理が中にあるんだ。人や物が生ずると、皆まずこれ（天の明命）を持っていくが、それは天が最初に付与したものに他ならないのだ。まずこれ（天の明命）があつて、それから始めてこの形を備えて生じ、そして皮が（天の明命を）中に包み込むのだ。もしこれがあつて、この外殻が無かつたら、包み込むことはできない。草木の生ずる際のことを言えば、その場合もやはり、この生きようとすゝる意志があれば、若葉を生じさせることができ、若葉が出て来たら、皮状のものが包み込んでしまふのだ。今の儒者はひたすらこれ（天の明命）に取り組み、性命の道理に従うようにしなければならぬ。「氣」を守ろうとして、それを離散させないようにして、すぐに不老不死になれる、とする。不死の者など見たことがないし、たとえやり抜いたとしても、死なない、というだけのことだ。仏教徒もひたすらこれを認識しようとするが、（彼らは認識した上で）すぐに放下してしまうので、それ故生死や吉凶に動ぜられることがない、とする。しかし仏教徒は（「天の明命」を）いじくっているだけだ。

また仰った。「各々の性命を正し、太和を保合す。」「周易『乾卦象伝』と云つて、聖人が乾卦においてこの兩句を提唱しているのは、とても

よい。人の人たる所以、物の物たる所以というのは、皆いづれもその性命を正すことにこそあるのだ。この『和氣』を『保合』すれば、『性命』は最初に稟受したままのものに他ならなくなるのだ。『保合』というのは、この皮が中に包み込んでいく、ということだ。ちょうど人が刀剣で腹を引き裂くと、これ（氣）が散じて死んでしまふというようなものだ。林夔孫録

〔注〕

(1) 「因説……」の話が出た折に。三浦國雄『朱子語類』抄

三三五頁参照。

(2) 「天之明命」『大学章句』伝一章「大甲曰。顧諟天之明命。」

(3) 「這箇物事、即是氣、便有許多道理在裏。」「明命」は「氣」であつて、「理」はその「氣」としての「明命」の中にある、とい

うことを説く。本条は、「氣」が「理」に先行するものとして説くようにも思われるが、『語類』全体を通じて、朱子の理氣の先後に対する見解は必ずしも一定していない。「氣」が「理」に先行するように説くものとしては、『語類』卷一、六条、董銖録（I）
②「天下未有無理之氣、亦未有無氣之理。氣以成形而理亦賦焉。」が挙げられ、「理」が先行するように説くものとしては、卷一、九条、林夔孫録（I）
③「問理與氣。曰。有是理便有是氣。」が挙げられる。また両者に先後はないと説くものとしては、卷一、一一條、萬人傑録（I）
④「或問。必有是理、然後有是氣、如何。曰。此本無先後之可言。……無是氣則是理亦無掛塔處。」がある。

(4) 「當初」最初に。『語類』卷一五、一〇四条、滕璘録、(I 303)に既出。

(5) 「便有皮包裹在裏」「包裹」は包み込む、の意。『語類』卷一一九、七条、黄義剛録(VII 2809)「先生曰。聖人便是一片赤骨立底天理、光明照耀、更無蔽障。顔子則是有一重皮了。但其他人則被這皮子包裹得厚、剝了一重又一重、不能得見那裏面物事。」なお心と性に関する以下の発言に照らせば、心は包裹するもの、性は包裹されるもの、ということになり、従って皮、皮殼(氣)によって包裹されるものとは理を指すと考えられる。『語類』卷五、六四条、黄義剛録(I 91)「曰。若以穀譬之、穀便是心、那爲粟、爲菽、爲禾、爲稻底、便是性。康節所謂心者性之郛郭、是也。包裹底是心、發出不同底是性。』『語類』卷九五、八八条、林夔孫録(VI 2438)「心性以穀種論、則包裹底是心。有稭種、有梗種、隨那種發出不同、這便是性。」

(6) 「如草木之生、亦是有箇生意了」「生意」は、物が生きようとする意志。『語類』卷二〇、九一条、吳雉録(II 465)に「又曰。以穀種譬之、一粒穀、春則發生、夏則成苗、秋則結實、冬則收藏、生意依舊包在裏面。每箇穀子裏、有一箇生意藏在裏面、種而後生也。仁義禮智亦然。」とあるように、朱子は生命の發育をこの「生意」の働きに関わるものと考えている。また朱子はこの「生意」を、生命が持つ原理としての「生理」と区別して理解し、『語類』卷四、二七条、葉賀孫録(I 92)に「竹椅便有竹椅之理。枯槁之物、謂之無生意、則可。謂之無生理、則不可。」とあるように、枯れた

植物は、「生理」はあっても、「生意」は持たない、と考える。

(7) 「便有皮包裹著」「著」は動作の完了を現す助辞。

(8) 「順性命之理」『周易』説卦伝「昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天之道曰陰與陽。」

(9) 「把住」守る、の意。『語類』卷九五、一四一条、林夔孫録(VI 2450)「内外夾持、如有人在裏面把住、一人在門外把持、不由他不上去。」

(10) 「不肯與他散」氣の聚散によって生死を説くことから、氣の拡散は死を意味する。『莊子』外篇「知北游」「人之生、氣之聚也。聚則爲生、散則爲死。』『語類』卷三、一七条、湯泳録(I 30)「氣聚則生、氣散則死。」氣を散じさせないとは、不死を希求する立場を意味し、ここでは道教の養生法を指すものと思われる。

(11) 「長生久視也未見得、只是做得到、也便未會死」『朱子語類考文解義』はこの部分を、「也未見得、謂未見其長生者。」と解釈する。また、「長生久視」の語は、『老子』五九章「早服謂之重積德、重積德則無不克、無不克則莫知其極、莫知其極、可以有國。有國之母、可以長久。是謂深根固柢、長生久視之道。」に基づく。「做得到」はやり抜く。朱子の道教と仏教に対する批判は以下を参照。『語類』卷一二六、一六条、余大雅録(VIII 3033)「老氏只是要長生、節病易見。釋氏於天理大本處見得些分數、然却認爲己有、而以生爲寄。」また朱子は、以下に引く用例に示されるように、いたずらに長く生き長らえることを、道理を体得することよりも価値の低いものと考えており、ここに「只是做得到、也便未會死」とする

立場が現れているものと思う。『語類』卷二六、八二条、李壯祖録(II 86)。「若人而聞道、則生也不虛、死也不虛。若不聞道、則生也枉了。死也枉了。」

(12) 「放得下」「放下」で既出。放り出す、やめる、執着を絶つ。『語類』卷一五、一〇七条、董銖録、(I 303)。『岩波仏教辞典』「放り投げて落とす、放棄するの意。仏教語としては、心身にまつわる一切の執着、またその原因となるすべてのものを捨離すること。」

(13) 「作弄」弄ぶ、いじくる、の意。『語類』卷一二六、一三四条、沈憫録(VIII 3035)「後來達磨入中國：到得後來：不必看經、不必靜坐、越弄得來闊、其實只是作弄這些精神。」

(14) 「各正性命、保合太和」『周易』乾卦象伝「乾道變化、各正性命、保合太和、乃利貞。」「本義」「變者、化之漸。化者、變之成。物所受爲性、天所賦爲命。太和、陰陽會合沖和之氣也。各正者、得於有生之初。保合者、全於已生之後。此言乾道變化、无所不利、而萬物各得其性命以自全。以釋利貞之義也。」

14条

而今人會說話行動、凡百皆是天之明命、人心惟危、道心惟微、也是天之明命。 夔孫

〔校勘〕

○「而今人會說話行動」朝鮮古写本は「人」を「人之」に作る。

〔訳〕

今、人がしゃべったり行動したりすることができる、それらの一切全てが「天の明命」であり、「人心惟れ危うし、道心惟れ微かなり」もやはり「天の明命」である。 林夔孫録

〔注〕

(1) 「凡百」一切、の意。『語類』卷八〇、三六条、邵浩録(VI 3074)「伯恭凡百長厚、不肯非毀前輩、要出脫回護。」

(2) 「人心惟危、道心惟微」『尚書』「大禹謨」「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。」

傳二章釋新民

15条

苟日新一句是爲學入頭處。而今爲學、且要理會苟字。苟能日新如此、則下面兩句工夫方能接續做去。而今學者只管要日新、却不去苟字上面著工夫。苟日新、苟者、誠也。 泳

〔校勘〕

○「苟日新一句」朝鮮古写本は冒頭に「盤銘三句」の四字が多い。

○「上面著工夫」朝鮮古写本は「著」を「着」に作る。

○「却不去苟字上面著工夫」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「苟日新、苟者、誠也」朝鮮古写本は「苟日新、苟、誠也。要緊在此一字。」となっており、一六条の内容と共通している。

○「泳」朝鮮古写本は「泳○賀孫録同」に作る。

〔訳〕

「苟に日に新た」の一句は学問におけるとっかかりの箇所だ。今、学問をするに際しては、ひとまず「苟」の字に取り組まないといけない。本当に日に新たにすることがこのようであつてこそ、はじめて後の二句の工夫（日に新た、又た日に新た）は続いていけるのだ。今の学者はひたすら「日に新た」にしようとするだけで、「苟」の字に即して工夫しようとするしない。「苟に日に新た」における「苟に」とは「誠」のことだ。湯泳録

〔注〕

(1)「苟日新」『大学章句』伝二章「湯之盤銘曰。苟日新、日日新、又日新。」朱注「苟、誠也。湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢。故銘其盤、言誠能一日有以滌其舊染之汗而自新、則當因其已新者、而日日新之、又日新之、不可略有間斷也。」

(2)「入頭」とっかかり。『朱文公文集』卷五三「答胡季随」第一書「易

傳平淡縝密極好看、然亦極難看。大抵講學須先有一入頭處、方好下工夫。」

(3)「却不去苟字上面著工夫」「去」は心理的な方向を表す助字。三浦國雄『朱子語類』抄三四頁。「上面」は、の上、ののところ、ゝに即して。「著」は用いる、行う。

(4)「泳」『朱子語録姓氏』に出現する「泳」には胡泳と湯泳の二名が有り、両者を区別する為に、胡泳の場合はフルネームで記録者名を記す。従つて「泳」一文字の場合は湯泳を指すことになる。三浦國雄『朱子語類』抄頁九五。

16条

苟、誠也。要緊在此一字。賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本は本条を独立した一条とせず、一五条の末尾に同文が見える。

〔訳〕

「苟」とは「誠」ということだ。重点はこの一字にある。葉賀孫

録

〔注〕

(1)「苟、誠也。」『大学章句』伝二章「湯之盤銘曰。苟日新、日日新、又日新。」朱注「苟、誠也。」

(2)「要緊」重点のこと。既出。『語類』卷一四、三七条、葉賀孫録(一) 230(2) 参照。

17条

苟日新。須是真箇日新、方可日日新、又日新。 泳

〔校勘〕

○「須」万曆本、和刻本は「湏」に作る。

○「真箇日新」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

〔訳〕

「苟に日に新たに」について。本当に日に新たにしておく、はじめて「日に新たに、又た日に新たに」できるので。 湯泳録

18条

舊來看大學日新處、以爲重在後兩句、今看得重在前一句。苟字多訓誠字。 璘

〔校勘〕

○諸本異同無し。

〔訳〕

(先生) 以前『大学』の「日新」の箇所を見て、重点は後の二句(「日新、又日新」)にあると考えていたが、今は、重点は前の一句にあるとわかった。「苟」の字は「誠」字に訓詁することが多い。 滕璘録。

19条

苟字訓誠、古訓釋皆如此、乍看覺差異。人誠能有日新之功、則須日有進益。若暫能日新、不能接續、則前日所新者、却間斷衰頹了、所以不能日日新、又日新也。 人傑

〔校勘〕

○「須」万曆本、和刻本「湏」に作る。

○「却間斷衰頹了」朝鮮古写本は「斷」を「断」に作る。

〔訳〕

「苟」の字を「誠」と訓詁するのは、古の訓詁ではいずれもそのようであるが、一見する限り、やや違和感を覚えるが、しかし人に本当に「日新」の工夫があれば、日々進歩があるに違い無い。もしかりそ

めに「日新」しただけで、継続できなければ、前日に新たにしたこと
は、途切れてだめになってしまい、それ故「日々に新たにし、又日に
新た」にすることができなくなってしまうのだ。 萬人傑録

〔注〕

〔1〕「苟字訓誡、古訓釋皆如此」『周易』繫辭下伝「苟非其人」『周

易集解』引虞翻注「苟、誡。」

〔2〕「衰頹」劣っている様を言う。『語類』卷四、九二条、徐舛録（I

）「稟得精英之氣、便爲聖、爲賢、便是得理之全、得理之正。
…稟得衰頹薄濁者、便爲愚不肖、爲貧、爲賤、爲夭。」

20条

苟日新、新是對舊染之汗而言。日日新、又日新、只是要常常如此、
無間斷也。新與舊、非是去外面討來。昨日之舊、乃是今日之新。道夫云。
這正如孟子操存舍亡說、存與亡、非是有兩物。曰。然。只是在一念間
爾。如顧諟天之明命、上下文都說明德、這裏却說明命。蓋天之所以與
我、便是明命。我之所得以爲性者、便是明德。命與德皆以明爲言、是
這箇物本自光明、顯然在裏、我却去昏蔽了他、須用日新。說得來、又
只是箇存心。所以明道云、聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心約之使
反覆入身來。自能尋向上去、下學而上達也。 道夫

〔校勘〕

○「苟日新」朝鮮古写本はこの三字無し。

○「無間斷也」朝鮮古写本は「斷」を「斷」に作る。

○「孟子操存舍亡說」朝鮮古写本は「孟子操存舍亡之說」に作る。

○「只是在一念間爾」朝鮮古写本は「這只是在一念間爾」に作る。

○「如顧諟天之明命」朝鮮古写本は「只如顧諟天之明命」に作る。

○「這裏却說」万曆本、和刻本は「裏」字を「裡」に作る。以下同じ。

○「蓋天之所以與我」万曆本、和刻本、朝鮮古写本は「蓋」字を「蓋」
に作る。

○「是這箇物本自光明」万曆本、和刻本は「箇」字を「个」に作る。

以下同じ。

○「須用日新」朝鮮古写本は「却須用日新」に作る。また万曆本、

和刻本は「須」字を「湏」に作る。

○「說得來」朝鮮古写本は「到德地說得來」に作る。

○「反覆入身來」「反」を朝鮮古写本は「及」に作る。「覆」を朝鮮

古写本、朝鮮整版本は「復」に作る。

〔訳〕

「苟に日に新た」の「新」とは、旧来の染みついた汚れに対して言
っている。『日日新たに、又た日に新たに』とは、ただ、常にこのよ
うにして、途切れることが無いようにすることだ。「新」と「旧」と
は外面に向かって探っていくものではない。昨日「旧」であったもの
が、今日には「新」となるのだ。楊道夫は言った。「これはちょうど『孟
子』の『操れば則ち存し、舍つれば則ち亡くす』の説が、「存」と「亡」

の二つのものがあるのではない（放心を存するか否かの一事でしかない）、というのと似ています。」先生が仰った。「その通りだ。自分の意識の中で他に他ならない。『禔の天の明命を顧みる』の前後の文はみな明德を説くのに、この部分は明命を説く。思うに、天が自分に与えるものがつまり明命で、自分が得て性とするものが、つまり明德なのだ。『命』と『徳』とはどちらも『明』という言葉を用いるが、それはこれらが元々光り輝いていて、顕然と（心の）中にあるのだが、私たちはそれを昏まし蔽ってしまうので、『日に新たに』しないといけない、ということなのだ。言うならば、それはまた（『孟子』盡心篇の）『心を存す』でもある。だから明道は以下のように言ったのだ。『古の聖賢の膨大な教えは、要するに失ってしまった良心を探し求めて取り収め、繰り返し我が身に入れさせるものだ。自ら「放心」を求めて向上できたならば、（孔子の言う）下学上達といえよう。』と。」楊道夫録

〔注〕

- (1) 「舊染之汙」心の汚れを指す。『大学章句』伝二章「湯之盤銘曰。苟日新、日日新、又日新。」朱注「湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢、故銘其盤、言誠能一日有以滌其舊染之汙而自新、則當因其已新者、而日日新之、又日新之、不可略有間斷也。」
- (2) 「去外面討來」「討」は探す、求める。
- (3) 「操存舍亡」「孟子」「告子」上「孔子曰。操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。」

- (4) 「只是在一念間爾」「存するも亡ずるも、ただ一念の間にあり、全ては一念のあり方次第に係っている」ということ。『語類』卷一五、一〇七条、董銖録、(I 303)「一念纔放下、便是失其正。自古無放心底聖賢、然一念之微、所當深謹、纔說知至後不用誠意、便不是。」

- (5) 「上下文都說明徳」「大学」の伝の「大甲曰。顧諟天之明命。」の部分の上文は「康誥曰。克明德。」であり、直後の文は「帝典曰。克明峻徳。」であり、いずれも「徳」について語っている。

- (6) 「這箇物本自光明」「本自」は本より。「自」は単に二音節にするために添えられたもの。三浦國雄『朱子語類』抄』七一頁、卷一四、九二条、一一五条に既出。

- (7) 「又只是箇存心」「孟子」「盡心」上「存其心、養其性、所以事天也。」朱注「存、謂操而不捨。」

- (8) 「説得來」「言うならば」。校勘で指摘した通り、朝鮮古写本は「説得來」を「到恁地説得來」に作る。その場合は「ここにまで説き至ったならば」「結局のところ」の意。

- (9) 「明道云：」「二程遺書」卷一「聖賢千言萬語、只是欲人將已放之心、約之使反復入身來。自能尋向上去、下學而上達也。」本卷八条の注参照。

- (10) 「已放之心」失ってしまった良心。『孟子』「告子」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」朱注は『孟子』「告子」上のこの部分の注にこの明道語を引く。

- (11) 「反覆」繰り返すこと。『周易』乾卦象伝「終日乾乾、反復道也。」

朱子本義「反復、重復踐行之意。」

(12) 「下學而上達」『論語』「憲問」「子曰。不怨天、不尤人。下學而上達。知我者其天乎。」朱注引程子說曰「學者須守下學上達之語、乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣。」

(13) 「楊道夫」字仲愚、建甯人。既出。

21条

湯日日新。書云、終始惟一、時乃日新。這箇道理須是常接續不已、方是日新。才有間斷、便不可。盤銘取沐浴之義。蓋爲早間盥濯才了、晚下垢汗又生、所以常要日新。 德明

〔校勘〕

- 「湯日日新」朝鮮古写本は「湯之日新」に作る。
- 「這箇道理」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「這個道理」に作る。
- 「須是常接續不已」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「須是常接續不已」に作る。
- 「才有間斷」朝鮮古写本は「才有間斷」に作る。
- 「蓋爲早間盥濯才了」万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

〔訳〕

湯（の盤銘）には「日に新た」、尚書（咸有一德）には「終始惟一、時れ乃ちに新た」と言う。この意味は、常に持續して休むことがないようにしてこそ、始めて「日に新た」だ、ということだ。わずかでも途切れてしまえば、もうだめだ。（湯の）盤銘は沐浴の意味を取っている。思うに早朝に沐浴してやっと終わったばかりでも、晚には垢がまた生ずるのであり、だからいつも「日に新た」にせねばならないのだ。 廖德明録

〔注〕

- (1) 「終始惟一、時乃日新」『尚書』「咸有一德」「今嗣王新服厥命。惟新厥德。終始惟一。時乃日新。」集伝「終始有常、而無間斷、是乃所以日新也。」
- (2) 「盤銘取沐浴之義」『大學章句』伝二章「湯之盤銘曰。苟日新、日日新、又日新。」朱注「盤、沐浴之盤也。銘、名其器以自警之辭也。苟、誠也。湯以人之洗濯其心以去惡、如沐浴其身以去垢。故銘其盤、言誠能一日有以滌其舊染之汗而自新、則當因其已新者、而日日新之、又日新之、不可畧有間斷也。」
- (3) 「盥濯」盥で洗うことを言う。『語類』卷四〇、一一条、黄義剛録（Ⅲ 1026）「林恭甫問浴沂事。曰。想當時也真是去浴。但古人上已祓禊、只是盥濯手足、不是解衣浴也。」
- (4) 「晚下」おそくなってから。『字海便覽』「晚下トハ、バンカタ

ト云フコトナリ」

22条

徐仁父問。湯之盤銘曰。日日新。繼以作新民。日新是明德事、而今屬之作新民之上。意者、申言新民必本於在我之自新也。曰。然。莊子言、語道而非其序、則非道矣。横渠云、如中庸文字、直須句句理會過、使其言互相發。今讀大學、亦然。某年十七八時、讀中庸大學、每早起須誦十遍。今大學可且熟讀。賀孫

〔校勘〕

- 「繼以作新民」朝鮮古写本は「繼以作新民」に作る。
- 「而今屬之作新民之上」朝鮮古写本は「屬」を「属」に作る。
- 「直須句句理會過」万曆本、和刻本は「須」字を「湏」に作る。以下同じ。

〔訳〕

徐容が質問した。「湯の盤銘は『日に新たに』と言い、そのすぐ後に『新たに作る民を作す』と言います。『日新』とは『明德』のことですが、今『日新』を『新たに作る民を作す』の上に属させています。その意は、『民を新たに作る』ということが必ず、自分が自ら新たにすることにあるということに基づくことを、丁寧の説いているのでしようか。」先生「その通りだ。莊子は『道を語りて其の序に非ざれば、

則ち道に非ず」と言い、張載は『中庸の文字は一句一句考えて玩味していき、その言葉を互いに照らし合わせて明らかにさせるのがよい。』と言う。今『大学』を読む場合も同様である。私は十七、八歳の時に『中庸』や『大学』を読む時、いつも早起きして必ず十回声に出して読んだ。今、諸君もとりあえず『大学』を熟読してみなさい。」葉賀孫録

〔注〕

- (1)「徐仁父」徐容、字仁父、永嘉人、徐禹の弟。『考亭淵源録』卷一四、『朱子實紀』卷八、『儒林宗派』卷一〇はいずれも朱子の弟子に数える。
- (2)「作新民」『大学章句』伝二章「康誥曰。作新民」朱注「鼓之舞之之謂作、言振起其自新之民也。」
- (3)「莊子言、語道而非其序、則非道矣」『莊子』「天下」「語道而非其序者、非其道也。語道而非其道者、安取道。」
- (4)「横渠云、如中庸文字、直須句句理會過、使其言互相發。」『近思録』と『中庸輯略』は共にこの語を引いて「如中庸文字輩、直須句句理會過、使其言互相發明。」としている。
- (5)「某年十七八時、讀中庸大學」朱子が若年において辛苦しながら読書していたことについては以下の記録がある。『語類』卷一〇四、八条、楊道夫録(Ⅶ 2612)「某是自十六七時下工夫讀書、彼時四旁皆無津涯、只自恁地硬著力去做。至今日雖不足道、但當時也是喫了多少辛苦、讀了書。」

23条

鼓之舞之之謂作。如擊鼓然、自然使人跳舞踴躍。然民之所以感動者、由其本有此理。上之人既有以自明其明德、時時提撕警策、則下之人觀瞻感發、各有以興起其同然之善心、而不能已耳。 儻

〔校勘〕

○「儻」 呂留良本、伝経堂本を除く全ての版本は「儻」に作る。

○「上之人」 朝鮮古写本は「但上之人」に作る。

〔訳〕

「鼓舞することを、(新民を)起こす、という。」これは太鼓を打つ場合のようなもので、自然と周りのものを躍らせて奮い立たせることができるのだ。しかし民が感動するのも、民にもともとこの理が備わっているからである。上位者(為政者)がすでに自らの明德を明らかにし、また常に(下のもの)を目覚めさせて励ませば、下のものたちはそれを見て感動奮発し、それぞれが皆、同じく備えている自己の善心を喚起し、やめようとしてもやめることができないのである。 沈 儻録

〔注〕

(1)「鼓之舞之之謂作」『大学章句』伝二章「康誥曰。作新民。」朱注「鼓之舞之之謂作。言振起其自新之民也。」「鼓之舞之」は『易』に本

づく。『易』「繫辭上」子曰。聖人立象以盡意、…鼓之舞之以盡神。孔穎達疏「鼓之舞之以盡神者、此一句總結立象盡意、繫辭盡言之美。聖人立象以盡其意、繫辭則盡其言、可以說化百姓之心、百姓之心自然樂順、若鼓舞然、而天下從之。」

(2)「擊鼓」「踴躍」「踴躍」は躍り起こって、勢いよく進むこと。『詩經』「邶風」「擊鼓」「擊鼓其鐘、踴躍用兵。」

(3)「跳舞」『毛詩注疏』「閔雎」大序「情動於中、而形於言。言之不足、故嗟歎之。嗟歎之不足、故永歌之。永歌之不足、不知手之舞之、足之蹈之也。」

(4)「提撕警策」「提撕」は「提醒」、「提省」、「提警」、「喚醒」などと同義。精神を覚醒させる、励ます。「警策」はむちで打つていましめる、励ます、の意。

(5)「同然之善心」『孟子』「告子」上「至於心、獨無所同然乎。心之所同然者、何也。謂理也、義也。聖人先得我心之所同然耳。故理義之悅我心、猶芻豢之悅我口。」

(6)「各有以興起其同然之善心、而不能已」「不能已」については以下を参照。『大学或問』「既有是物、則其所以爲是物者、莫不各有當然之則、而自不容已。是皆得於天之所賦、而非人之所能爲也。」「身之所接、則有君臣・父子・夫婦・長幼・朋友之常、是皆必有當然之則、而自不容已、所謂理也。」

24条

周雖舊邦、其命維新。自新新民、而至於天命之改易、可謂極矣。必如是而後爲止於至善也。 侗

25条

〔校勘〕

其命維新、是新民之極、和天命也新。 大雅

○「侗」 呂留良本、伝経堂本を含む全ての版本は「侗」に作る。

○「天命之改易」 朝鮮古写本は「天命之新」に作る。

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

「周は旧邦であるが、その天命は新たである。」自らを新たににして民を新たにし、そして天命が改まる事態にまで至ったのは、(新民の)極地と言うべきである。かならずこのようであつてこそ、「至善に止まる」ことになるのだ。 沈侗録

〔訳〕

「その天命は新たである」というのは、民を新たにすることを究極なところまで行えば、天命さえも新たにすることができる、ということだ。 余大雅録

〔注〕

(1)「周雖舊邦、其命維新」『大学章句』伝二章「詩曰。周雖舊邦、

〔注〕

(1)「和天命也新」「和…也…」で「…さえも」「…すらも」。「和」は現代中国語の「連」と同じ。『宋元語言詞典』「和連、連同。」(頁五五一)

至於文王、聖徳日新而民亦不變。故天命之以有天下。是其邦雖舊、而命則新也。蓋民之視效在君、而天之視聽在民、君徳既新、則民徳必新、民徳既新、則天命之新亦不旋日矣。」

(2)「可謂極矣」『大学章句』伝二章「是故君子無所不用其極。」朱

注「自新・新民、皆欲止於至善也。」

26条

傳三章釋止於至善

緝熙黃鳥、止于丘隅。物亦各尋箇善處止、可以人而不如鳥乎。 德明

〔校勘〕

- 「箇」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。
- 「善處」 万曆本、和刻本は「處」を「處」に作る。

〔訳〕

「緝めんぱんと鳴く黄鳥は、丘隅に止まる」。物でさえそれぞれ良いところを見つけてそこに止まるのに、「人間がかえって鳥に及ばないようなことがあっていいのか」。 廖徳明録

〔注〕

(1) 「緝めんぱん黄鳥、止于丘隅」「可以人而不如鳥乎」「大学章句」伝三章「詩云。緝めんぱん黄鳥、止于丘隅。子曰。於止、知其所止、可以人而不如鳥乎。」朱注「緝、詩作綿。詩小雅綿めんぱん之篇。緝めんぱん、鳥聲。丘隅、岑蔚之處。子曰以下、孔子說詩之辭。言人當知所當止之處也。」「岑蔚」は、草や樹が深く茂る様子。

27条

於緝熙敬止。緝熙是工夫、敬止是功效收殺處。 寓

〔校勘〕

- 「收殺處」 万曆本、和刻本は「處」を「處」に作る。
- 「寓」 伝経堂本は「寓」に作る。

〔訳〕

「ああ、いつも輝き、敬つとんで止まる。」「いつも輝く」というのは工夫であり、「敬つとんで止まる」というのは、修養の効果が最終的に現れるところだ。 徐寓録

〔注〕

(1) 「於緝熙敬止」「大学章句」伝三章「詩云。穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。」朱注「於緝之於、音鳥。詩、文王之篇。穆穆、深遠之意。於、歎美辭。緝、繼續也。熙、光明也。敬止、言其無不敬而安所止也。引此而言聖人之止、無非至善。五者乃其目之大者也。學者於此、究其精微之蘊、而又推類以盡其餘、則於天下之事、皆有以知其所止而無疑矣。」

(2) 「收殺」「語類」では初出。「收斂」と同じ。収斂、収束。卷二〇、一一〇条、沈僩録(11469)「故生氣到此、自是收斂、若更生去、則無收殺了。」卷二九、六一條、呂燾録(11742)「如此等人、雖是

志意高遠、然非聖人有以裁正之、則一向狂去、更無收殺、便全不濟事了。」

28条

或言。大學以知止爲要。曰。如君便要止於仁、臣便要止於敬、子便止於孝、父便止於慈。若不知得、何緣到得那地位。只這便是至善處。

道夫問。至善、是無過不及恰好處否。曰。只是這夾界上些子。如君止於仁、若依違牽制、懦而無斷、便是過、便不是仁。臣能陳善閉邪、便是敬、若有所畏懼、而不敢正君之失、便是過、便不是敬。道夫

〔校勘〕

○「曰。如君便要止於仁」朝鮮古写本は「曰」を「先生曰」に作る。

○「便」朝鮮整版本は本条の「便」を全て「便」に作る。

○「子便止於孝、父便止於慈」朝鮮古写本は「子便要止於孝、父便要止於慈」に作る。

○「至善處」、「恰好處」万曆本、和刻本は「處」を「處」に作る。

○「無斷」朝鮮古写本は「斷」を「斷」に作る。

○「而不敢正君之失」呂留良本、伝経堂本以外の諸本は「而」字なし。

朝鮮整版本は「正」を「匡」に作る。

〔訳〕

ある人はいった。「『大学』は止まるところを知るを要としますね。」

（先生は）おっしゃった。「例えば君であればすなわち仁に止まらなけ

ればならず、臣であればすなわち敬に止まらなければならず、子であればすなわち孝に止どまり、父であればすなわち慈に止まるのだ。もし学ぶべきところを知らなければ、どうやってこのような境地に到達できるのだろうか。他でも無いこのようなところが、つまり「至善」というところなのだ。」

私、道夫は問うた。「『至善』というのは、過でも不及でもない、ちょうどいいところなのでしょうか。」（先生は）おっしゃった。「ただ過と不及の間にある、ほんのすこしの隙間だけだ。例えば主君は仁に止まるについては、もし周りを気にしてどっつかずの態度を取り、勇気をもって決断することができなければ、これはつまり過であり、仁ではない。もし臣下は良い行いを主君に勧め、主君の良からぬ意念を防ぐことができれば、これはつまり敬である。もし主君を恐れてその過失を正すことができなければ、これはつまり過であり、敬ではない。」楊道夫録

〔注〕

(1) 「如君便要止於仁、臣便要止於敬」云々 『大学章句』伝三章「爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。」

(2) 「地位」境地、レベル。卷一四、一二八条を参照。

(3) 「無過不及恰好處」「恰好」は「丁度いい」の意。

(4) 「只是這夾界上些子」「夾界」は境界。「這夾界上些子」は、過と不及の間には含まれたわずかの部分。過でもなく不及でもない、

ちようど良いところ。『朱子語類考文解義』「夾界上謂過不及兩間。不入於此、則便入於彼。如非不及、則便入於過也。夾謂兩邊相夾也。」

『朱子語類』での類義語としては、「兩夾界處」・「夾界半路」がある。卷一一、三四条、周謨録(1203)「學者之於善惡、亦要於兩夾

界處攔截分曉、勿使纖惡間絶善端。」卷二七、四九条、陳淳録(11681)

「信是枝葉受生氣底、恕是夾界半路來往底。信是定底、就那地頭說。

發出忠底心、便是信底言、無忠便無信了。」(徐時儀『朱子語類』

同義近義詞語考)(『寧波大学学報(人文科学版)』第二五卷第四期、

二〇一二年七月)によれば、さらに「兩隔界頭」、「半間半界」、「半

間不界」、「不間不界」などの類義語がある)

(5) 「此子」 いささか。ほんの少し。

(6) 「依違牽制」「依違」とは、或いは依り或いは違う、つまり意見態度がはつきりせず、曖昧な態度を取ること。『漢書』卷三六「劉

歆伝」「今聖上德通神明、繼續揚業、亦閔文學錯亂、學士若茲、

雖昭其情、猶依違謙讓、樂與士君子同之。」顔師古注「依違、言

不專決也。」「牽制」とは、引かれなすむ、つまりルールや周りの

ものなどに縛られ、自由に決められないこと。『漢書』卷九「元

帝紀」「少而好儒、及即位、徵用儒生、委之以政。貢・薛・韋・匡、

迭爲宰相。而上牽制文義、優游不斷。」顔師古注「爲文義所牽制、

故不斷決。」

(7) 「陳善閉邪」『孟子』「離婁」上「責難於君謂之恭、陳善閉邪謂之敬、吾君不能謂之賊。」朱注「范氏曰：開陳善道以禁閉君之邪心、

惟恐其君或陷於有過之地者、敬君之至也。」

(8) 「正君之失」『孟子』「離婁上」「惟大人爲能格君心之非。君仁莫不仁、君義莫不義、君正莫不正、一正君而國定矣。」

29条

問。至善、如君之仁、臣之敬、父之慈、子之孝者、固如此。就萬物

中細論之、則其類如何。曰。只恰好底便是。坐如尸、便是坐恰好底。

立如齊、便是立恰好底。 淳 寓同

〔校勘〕

○「便」 朝鮮整版本は本条の「便」を全て「便」に作る。

○「立如齊」 朝鮮古写本は「齊」を「齋」に作る。

○「寓同」 呂留良本は「寓」を「寓」に作る。朝鮮古写本は「寓録同」に作る。

〔訳〕

問うた。「至善」というのは、例えば君の仁であること、臣の敬であること、父の慈であること、子の孝であることは、もとよりのことですが、もし万事万物について細かく議論しようとするれば、それはどのようなものでしょうか。(先生は)おっしゃった。「他でも無い(過不及なく)ちようどいいところがつまりそれだ。「神主のように坐る」というのは、つまり坐る時のちようどいい座り方だ。「斎戒している

ように立つ」というのは、つまり立つ時のちよいどいい立ち方だ。」
陳淳録。徐寓の記録は同じ

〔注〕

(1) 「坐如尸」、「立如齊」『礼記』「曲礼」上「坐如尸、立如齊」。孔穎達疏「坐如尸者、尸居神位、坐必矜莊。言人雖不爲尸、若所在坐法、必當如尸之坐。…立如齊者、人之倚立、多慢不恭、故戒之云、倚立之時、雖不齊、亦當如祭前之齊、必須磬折屈身。」「齊」は「齋」と同じ。

30条

周問。注云、究其精微之蘊、而又推類以通其餘。何也。曰。大倫有五、此言其三、蓋不止此。究其精微之蘊、是就三者裏面窮究其蘊。推類以通其餘、是就外面推廣、如夫婦・兄弟之類。淳。謨録云。須是就君仁臣敬、子孝父慈與國人信上推究精微、各有不盡之理。此章雖人倫大目、亦只舉得三件。必須就此上推廣所以事上當如何、所以待下又如何。尊卑大小之間、處之各要如此。

〔校勘〕

- 「周問」朝鮮古写本は「問」に作る。
- 「何也」朝鮮古写本は「何謂也」に作る。
- 「蓋不止此」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「蓋」

に作る。

- 「裏面」、「外面」成化本、朝鮮古写本は「裏面」、「外面」に作る。万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。
- 「淳」伝経堂本は「澹」に作る。
- 「國人」万曆本、和刻本は「國」を「国」に作る。
- 「各有不盡之理」成化本、朝鮮整版本は「各無不盡之理」に作る。
- 「大小之間」成化本、鮮整版本は「小大之間」に作る。
- 「處之」万曆本、和刻本は「處」を「處」に作る。
- 朝鮮古写本に「謨録云」以下は無し。

〔訳〕

周謨が問うた。「注には、「その精微なる奥義を探究し、また類推してほかのところにも通じるようになる」と述べられています、これはどういうことでしょうか。」(先生は)おっしゃった。「人間にもっとも重要な倫理関係は五つあるが、本文はここで三つしか言及しておらず、まだまだあるはずだ。「その精微なる奥義を探究」というのは、この三つの中でその奥義を探究し尽くすことだ。「類推してほかのところにも通じるようになる」というのは、外へ推し広げて行き、夫婦・兄弟などにもたどり着くことだ。」陳淳録。

周謨の記録で先生はこうおっしゃった。「かならず君仁・臣敬・子孝・父慈と國人信についてその精微なるところを探究しなければならぬ。そうすればそれぞれ探究し尽くせないほどの理があるのだ。この章は人倫の要目についても、ただ三つしか挙げていない。このため

必ずそれらから推し広げ、上の者にどう事えるべきか、下の者にどう接するべきかというところにたどり着かなければならない。尊卑、大小の間にある様々な人間関係にも、このように対処しなければならぬ。」記録者名欠

〔注〕

(1)「周問」周謨、字舜弼、南康人。『朱子語録姓氏』所収。

(2)「注云。究其精微之蘊、而又推類以通其餘」『大学章句』伝三章「詩云。「穆穆文王、於緝熙敬止。」爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。

爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。」朱注「於

緝之於、音烏。詩、文王之篇。穆穆、深遠之意。於、歎美辭。緝、

繼續也。熙、光明也。敬止、言其無不敬而安所止也。引此而言聖

人之止、無非至善。五者乃其目之大者也。學者於此、究其精微之

蘊、而又推類以盡其餘、則於天下之事、皆有以知其所止而無疑矣。」

『大学或問』「曰。五者之目、詞約而義該矣。子之說、乃復有所謂

究其精微之蘊而推類以通之者、何其言之衍而不切耶。曰。舉其德

之要而總名之、則一言足矣。論其所以爲是一言者、則其始終本末、

豈一言之所能盡哉。…又况傳之所陳。姑以見物各有止之凡例、其

於大倫之目、猶且闕其二焉。苟不推類以通之、則亦何以盡天下之

理哉。」

(3)「大倫有五」人間にもっとも重要な人間関係は、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五つある。『孟子』「滕文公」上「聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、

朋友有信。」

(4)「淳。謨録云」『四書纂疏』(『大学』伝三章小注)は陳淳と周謨の記録を合わせ、一条として引用していることから、二人は朱子の一箇所での発言の、前半と後半をそれぞれ記録したと考えられる。

(5)「各有不盡之理」成化本と朝鮮整版本に従い、「各無不盡之理」とする場合、その訳は「そうすればそれぞれ探求し尽くせない理はないのだ」となる。なお、『四書纂疏』での本条の引用でも、「各無不盡之理」となっている。

31条

問。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自修也。此是詩人美武公之本旨耶、姑借其詞以發學問自修之義耶。曰。武公大段是有學問底人。抑之一詩、義理精密。詩中如此者甚不易得。 儒用

〔校勘〕

○「自修也」、「自修之義」成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「修」を「脩」に作る。

○「本旨耶、姑借其詞」朝鮮古写本は「本旨、抑姑借其詞」に作る。

○「以發學問自修之義耶」成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「耶」を「邪」に作る。

○「武公大段是有學問底人」朝鮮古写本は「武公」を「衛武公」に作る。

○「大段」 成化本、万曆本、呂留良本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「段」を「段」に作る。

〔訳〕

問うた。「(骨や角を) 切るように、擦るように」というのは、学問のことを言っているのである。「(玉や石を) のみで打つように、磨きをかけるように」というのは、自ら修養を重ねることである。「この文言は、詩人がもともと衛の武公を賛美するつもりで書いたものでしょうか、それともただこれを借りて進学と修養の道理を述べているのでしょうか。」(先生は) おっしゃった。「武公は相当学問のある人だ。(彼が書いた)『抑』の詩は、その義理は非常に精密である。『詩経』の中にはこのようなものは極めて得難い。」 李儒用録

〔注〕

(1) 「如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自修也」 『大学章句』 伝三章 「詩云。瞻彼淇澳、萋竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自脩也。」 朱注 「切以刀鋸、琢以椎鑿、皆裁物使成形質也。磋以鑢錫、磨以沙石、皆治物使其滑澤也。治骨角者、既切而復磋之。治玉石者、既琢而復磨之。皆言其治之有緒、而益致其精也。…道、言也。學、謂講習討論之事。自脩者、省察克治之功。…道學自脩、言其所以得之之由。」 なお「道學」、「自修」については、『毛詩注疏』における鄭玄の箋は「道其學而成也。聽其規諫、

以禮自脩、如玉石之見琢磨也」と、孔穎達の疏は「云。如切如磋、道學也。郭璞曰。象骨須切磋而爲器、人須學問以成德。又云。如琢如磨、自脩也。郭璞曰。玉石之被琢磨、猶人自脩飾也」と解釈している。

(2) 「此是詩人美武公之本旨耶」 『毛詩注疏』 衛風「淇奥」序「淇奥、美武公之德也。有文章、又能聽其規諫、以禮自防。故能人相于周。美而作是詩也。」 『詩集伝』 衛風「淇奥」序「淇奥、美武公之德也。」

(3) 「本旨」 本来の趣旨・意味。

(4) 「大段」 大いに、たいそう。

(5) 「抑之一詩」 『毛詩注疏』 「大雅・抑」序「抑、衛武公刺厲王、亦以自警也。」 『詩集伝』 大雅「抑」序「抑、衛武公刺厲王、亦以自警也。宣王十六年、衛武公即位、年九十有五而作此詩、蓋追刺厲王以自警也。」

32条

至善一章、工夫都在切磋琢磨上。 泳

〔校勘〕

○「至善一章」 朝鮮古写本は「大學至善一章」に作る。

〔訳〕

「至善」の一章は、その工夫はすべて「切磋琢磨」にある。 湯泳

録

33条

既切而復磋之、既琢而復磨之、方止於至善。不然、雖善、非至也。

節

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

切ったらさらに擦り、のみで打つてからさらに磨きをかけ、それで初めて至善に止まることができるのだ。そうしなければ、善に到達できるとしても、それは至極の善ではないのだ。 甘節録

34条

傳之三章、緊要只是如切如磋、如琢如磨。如切可謂善矣、又須當磋之、方是至善。如琢可謂善矣、又須當磨之、方是至善。一章主意、只是說所以止於至善工夫、爲下不可諠兮之語拖帶說。到道盛德至善、民不能忘、又因此語一向引去。大概是反覆嗟咏、其味深長。他經引詩、或未甚切、只大學引得極細密。 賀孫

〔校勘〕

○「傳之三章」 朝鮮古写本は「大學傳之三章」に作る。
○「民不能忘」 朝鮮整版本は「忘」を「忘」に作る。
○「大概」 呂留良本、伝経堂本を含む全ての版本は「概」を「槩」に作る。

○「深長」 呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本は「深」を「濶」に作る。

〔訳〕

伝の第三章は、そのもっとも重要なところはただ「切るように擦るように、のみで打つように磨きをかけるように」だけだ。切るかのようになればそれでも善とはいえるが、さらに擦らなければならず、それでこそ至善なのだ。のみで打つかのようになれば善といえるが、さらに磨きをかけねばならず、それでこそ至善なのだ。この一章の趣旨は、ただ如何にして至善に止まるかの工夫を説くところだけにあり、下の「誼ちがひれられない」という文言に持つていこうとするのだ。「崇高な道徳は至善であり、民はこれを忘れることができなことを述べている」に至っては、またこの文言から直接導き出されたものなのだ。おおかたは繰り返して詠い、その味わいは奥深く含蓄があるものだ。ほかの経書が『詩経』を引用する時は、十分に切実ではない場合があるが、『大学』の引用だけはきめ細かいところまで考慮を入れている(ため不切実なところがない)。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「拖帶」 引っ張って行く。

(2) 「一向」 ひたすら。もっぱら。

(3) 「大概」 おおかた。ひととおり。

(4) 「其味深長」 『大学章句』伝三章「詩云。瞻彼淇澳、菉竹猗猗。

…此以沒世不忘也。」朱注「此兩節咏歎淫泆、其味深長、當熟玩之。」

『二程遺書』卷一九「先生云。某自十七八讀論語。當時已曉文義。讀之愈久、但覺意味深長。」

35条

魏元壽問切磋琢磨之說。曰。恰似剝了一重、又有一重。學者做工夫、消磨舊習、幾時便去教盡。須是只管磨礪、教十分淨潔。最怕如今於眼前道理略理會得些、便自以爲足、更不著力向上去、這如何會到至善田地。 賀孫

〔校勘〕

○ 「魏元壽問切磋琢磨之說」 朝鮮古写本は「魏元壽問止於至善傳、舉切磋琢磨之說」に作る。

○ 「去教盡」 朝鮮古写本は「去得盡」に作る。

○ 「十分」 成化本、万曆本、和刻本は「十方」に作る。

○ 「便」 朝鮮整版本は「便」に作る。

○ 「更」 朝鮮整版本は「更」に作る。

○ 「著力」 成化本、万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」

に作る。

○ 「向上去」 朝鮮古写本は「去」を「云」に作る。

〔訳〕

魏元壽が「切磋琢磨」の說についてたずねた。(先生は)おっしゃった。「これはあたかも、一層を取り除いたら、また一層を取り除かなければならないようなものだ。学ぶ者は修養の工夫を重ねて、身に付けてしまった悪い習慣をなくそうとするが、一体いつになったら残らずに取り除けることができるだろう。ただひたすら磨きをかけ、十分にきれいになるまでやらなければならぬ。もつともいけないのは、一旦目の前の道理がややわかるようになったら、それで十分だと思ひ、さらに努力して上に進もうとしないことだ。これでは、どうして至善といふところまで到達できるだろうか。」 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「魏元壽」 魏椿、字は元壽、建寧府建陽県の人。『朱子門人』頁三五八。

(2) 「恰似」 あたかも…のようである。ちようど…のようである。

(3) 「消磨舊習」 「消磨」はこすり去る。払拭する。『語類』卷五、三四条、廖謙録(一〇)「古人學問便要窮理知至、直是下工夫消磨惡去、善自然漸次可復。」

(4) 「只管磨礪」 「磨礪」は「磨礪」と同じ。ときみがく。『字海便覽』「磨礪トハ、ミガクコトナリ。」

(5) 「教」 使役を表す言葉。させる。

(6) 「田地」 段階、レベル。「地位」、「地歩」などと同じ。

36条

骨角却易開解、玉石儘著得磨措工夫。 賀孫

〔校勘〕

○「開解」 万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

○「著得」 成化本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

〔訳〕

骨、角は切り分けたり削ったりするのは簡単だが、玉や石はたいそう手間をかけて磨きをかけなければならない。 葉賀孫録

〔注〕

(1) 「骨角却易開解」云々 『大学或問』「曰。切磋琢磨、何以爲學問自脩之別也。曰。骨角脉理可尋而切磋之功易、所謂始條理之事也。玉石渾全堅確而琢磨之功難、所謂終條理之事也。」

(2) 「開解」 分割したり一部を取り除いたりすること。

(3) 「儘著」「儘」はきわめて、あれこれと、の意。「著」は付ける、行うの意。卷一四、三〇条を参照。

(4) 「磨措」「措磨」と同じ。こすり磨く、磨きをかける。卷

一四、一五条を参照。

37条

瑟、矜莊貌。倜、武貌。恂慄、嚴毅貌。古人直是如此嚴整、然後有那威儀烜赫著見。 德明

〔校勘〕

○「倜」 呂留良本、伝経堂本を含む全ての版本は「倜」に作る。

〔訳〕

「瑟」は誇り高くおごそかなさま。「倜」は勇ましいさま。「恂慄」は嚴肅で力強いさま。古の人はまさにこのように嚴かでした。つまり、しかるのちにその輝く威嚴と礼儀正しさが表れてくるのだ。

廖德明録

〔注〕

(1) 「瑟、矜莊貌」云々 『大学章句』伝三章「瑟兮倜兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮。」朱注「瑟、嚴密之貌。倜、武毅之貌。」

(2) 「直是」「直」は、まさに、まったく、の意。『禪語辞典』「直是」「まさに。」卷一四、一六四条を参照。

(3) 「威儀烜赫」 『大学章句』伝三章「瑟兮倜兮者、恂慄也。赫兮喧

兮者、威儀也。」朱注「赫喧、宣著盛大之貌。…威、可畏也。儀、可象也。」『毛詩注疏』衛風「淇奥」は「赫兮喧兮」を「赫兮喧兮」に作る。

38条

問。解瑟爲嚴密、是就心言、抑就行言。曰。是就心言。問。心如何是密處。曰。只是不粗疏、恁地縝密。 寓

〔校勘〕

○「解瑟爲嚴密」 朝鮮古写本は「大學解瑟爲嚴密」に作る。万曆本、和刻本は「解」を「解」に作る。

○「密處」 万曆本、和刻本は「處」を「處」に作る。

○「粗疏」 成化本、朝鮮古写本は「麓疎」に作る。万曆本、朝鮮整版本は「疏」を「疎」に作る。呂留良本、伝経堂本は「疏」を「疎」に作る。

○「寓」 朝鮮古写本は「淳○寓同」に作る。

〔訳〕

問うた。「瑟」を「嚴密」と解釈したのは、心についていうのでしようか、それとも行いについていうのでしようか。」（先生が）おっしゃった。「心についていつている。」問うた。「心は如何にして密といえるのでしようか。」（先生が）おっしゃった。「ただ粗雑でさえなけ

れば、かくも緻密になれるのだ。」 徐寓録

〔注〕

(1) 「恁地」 このように。卷一四、一八条に既出。

39条

憊、武毅之貌、能剛強卓立。不如此怠惰闌颯。 憊

〔校勘〕

○「憊」 呂留良本、伝経堂本を含む全ての版本は「憊」に作る。

○「怠惰」 朝鮮古写本は「息惰」に作る。

〔訳〕

「憊」とは、勇ましくて力強い様子のこと、（周りに邪魔されずに）力強く、人々から抜きん出てしつかりと立てることだ。これができなければ、人間は怠けて何の取るべきところもないものになる。 沈憊録

〔注〕

(1) 「憊、武毅之貌」 『大学章句』伝三章「詩云。瞻彼淇澳、萋竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮憊兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮。」朱注「憊、武毅之貌。」

(2) 「不如此怠惰闌颯」『字海便覧』「怠惰闌颯トハ、オコタリテ、ツ
 タナキ貌ナリ。」「闌颯」は「闌駮」と同じ。つまらない。見どこ
 ろがない。卷一三九、一七条、呂熹録(Ⅷ 3301)「有人後生氣盛時、
 説盡萬千道理、晩年只恁地闌駮底。」同卷、一一六条、呂熹録(Ⅷ
 3321)「文字奇而穩方好。不奇而穩、只是闌駮。」

40条

問。瑟者、武毅之貌。恇慄、戰懼之貌。不知人當戰懼之時、果有武
 毅之意否。曰。人而懷戰懼之心、則必齋莊嚴肅、又烏可犯。 壯祖

〔校勘〕

○「問」朝鮮古寫本は「問」の下に「淇澳詩瑟兮僩兮者恇慄也注云」
 の十三字がある。

○「恇慄戰懼之貌」朝鮮古寫本は「而恇慄則戰懼之貌也」に作る。

○「壯祖」朝鮮古寫本は「處謙」に作る。

〔訳〕

質問した。「瑟とは武毅の貌、恇慄とは戰懼の貌、とありますが、
 人は戦おののき懼れているときに、剛毅な心持ちでいられることなどある
 でしょうか。」先生がおっしゃる。「人が戦おののき懼れる心を懐いてい
 るときには、必ず嚴肅な気持ちになるもので、どうして他人がどうこう
 できようか（それは余人が入り込めない嚴肅さなのだ）。」李壯祖録

〔注〕

(1) 「瑟者云云」『大學章句』には「瑟、嚴密之貌。僩、武毅之貌。」
 とあって、「瑟」は「嚴密」とし、「僩」のほうを「武毅」とする。
 また「恇慄、戰懼之貌」については、続く「章句」に「恇慄、戰懼也。」
 とする。

(2) 「齋莊」「齋莊」は嚴肅につつしむさま。『史記』卷六「秦始皇
 本紀」「遂登會稽宣省習俗、黔首齋莊、群臣誦功。」「河南程氏遺書」
 卷一五、五四条「二者無他、只是整齊嚴肅、則心便一。」

(3) 朝鮮古写本の記録者「處謙」は李壯祖の字。

41条

問。恇慄、何以知爲戰懼。曰。莊子云、木處、則恇慄危懼。 廣

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

質問した。「恇慄、というのは、どうしてそれが戦おのき懼れることだ
 とわかるのでしょうか。」先生のお答え。「莊子に「木の上にいると、
 びくびくしておそれおのく」と言っている。」輔廣録

〔注〕

(1) 「莊子云」現在の『莊子』は「惴慄危懼」ではなく「惴慄恟懼」に作る。『莊子』「齊物論」「民濕寢則腰疾偏死、皤然乎哉。木處則惴慄恟懼、猿猴然乎哉。三者孰知正處。」この「恟」の字を、朱子をはじめ『論語』郷黨の「孔子於郷黨恟恟如也」の「恟」(同所集注「信實貌」)と同じと考えていたが、のち鄭玄が「峻」とする(『禮記』「大学」鄭注「恟字或作峻、讀如嚴峻之峻、言其容貌嚴栗也」)のに従ったのは、この『莊子』の「木處則惴慄恟懼」を讀んでそのように考えた、としている。『語類』卷一七、五七条、楊道夫録(II 388)「且如恟字、鄭氏讀爲峻、某始者言此只是恟恟如也之恟。何必如此。及讀莊子、見所謂木處則惴慄恟懼、然後知鄭氏之音爲當。如此等處、某於或問中不及載也。要之、如這般處須是讀得書多、然後方見得。」『大学章句』伝三章、朱注「恟、鄭氏讀作峻。」

42条

大率切而不磋、亦未至至善處。琢而不磨、亦未至至善處。瑟兮僂兮、則誠敬存於中矣。未至於赫兮喧兮、威儀輝光著見於外、亦未爲至善。此四句是此段緊切處、專是說至善。蓋不如此、則雖善矣、未得爲至善也。至於民之不能忘、若非十分至善、何以使民久而不能忘。古人言語精密有條理如此。 銖

〔校勘〕

○「蓋不如此」朝鮮古写本、万曆本、和刻本は「蓋」を「蓋」に作る。
○「喧兮」成化本、萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「烜兮」に作る。
朝鮮古寫本は「烜兮」に作る。

〔訳〕

およそ骨を切り出してもみがかなければ、やはりまだ至善のところ
にまでは到達していない。玉を切り出してもみがかなければ、やはり
まだ至善のところには到達していない。嚴肅剛直であれば、誠敬
はその中にあるのだが、嚴肅な立居振舞のもつ輝きはつきりと外に
あらわれるところまで至っていないければ、やはりまだ至善とはいえな
い。この「如切如磋、如琢如磨、瑟兮僂兮、赫兮喧兮」という四句が、
この段の中の肝要な箇所であり、ひとえに至善を説いているのだ。思
うにこの四句のようであれば、たとえ善であったとしても、まだ至
善とはなしえないのだ。「民が忘れることが出来ない」という部分に
ついて、もし十分に至善でなければ、どうして民に対していつまで
も忘れることが出来ないようにさせることができるか。こんなふう
に古人の文章というものは精密できっちり道理が通っているものなの
だ。 董銖録

〔注〕

(1) 「誠敬」『語類』卷六、三〇条、王過録(I 103)「先生問諸友、
誠敬二字如何分。各舉程子之説以對。先生曰。敬是不放肆底意思、

誠是不欺妄底意思。」

- (2) 「威儀」『大學章句』傳三章「赫兮喧兮者、威儀也。」朱注「威可畏也、儀可象也。引詩而釋之、以明明明德者之止於至善、道學自脩、言其所以得之之由。恂慄威儀、言其德容表裏之盛。」『書經』「顧命」「思夫人自亂于威儀」集傳「威者有威可畏、儀者有儀可象、舉一身之則而言也。蓋人受天地之中以生。是以有動作威儀之則。成王思夫人之所以爲人者自治於威儀耳也。」

- (3) 「輝光」『周易』「大畜」「豕曰。大畜、剛健篤實輝光、日新其德。」
- (4) 「古人言語精密」『朱文公文集』續集卷二「答蔡季通」「古人文字精密如此、而後人讀之鹵莽如此。甚可歎也。」

- (5) 「條理」『孟子』「萬章」下「孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也。金聲也者、始條理也。玉振之也者、終條理也。始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也。」集注「條理、猶言脈絡。」

43条

民之不能忘也、只是一時不忘、亦不是至善。又曰。瑟兮僖兮、赫兮喧兮者、有所主於中、而不能發於外、亦不是至善。務飾於外、而無主於中、亦不是至善。 銖

〔校勘〕

- 朝鮮古寫本卷一六は本条を載せない。
- 「喧兮」成化本、萬曆本、和刻本は「誼兮」に作る。朝鮮整版本は「喧

兮」に作る。

- 「飾」萬曆本、和刻本は「飾」に作る。

〔訳〕

「民の忘る能はざるなり」とあるが、一時的に忘れないだけでは、やはり至善ではない。」またおっしゃった。「瑟たり僖たり、赫たり喧たり」とあるのは、心の中でそれを主宰するものが確立していても、それが外に現れ出てくることができなければ、やはりこれは至善ではない。外面を飾ることはかりに心をくだいても、肝腎の心に主宰がなければ、これもまた至善ではない。」董銖録

〔注〕

- (1) 「主於中、發於外」『孟子』「告子」上「惻隱之心、人皆有之」集注「恭者、敬之發於外者也。敬者、恭之主於中者也。」『禮記』「樂記」「誠於中、形於外。」
- (2) 「飾於外」『論語』「學而」「子曰巧言令色鮮矣仁」集注「巧好、令善也。好其言、善其色、致飾於外、務以悅人、則人欲肆而本心之德亡矣。」

44条

問前王不忘云云。曰。前王遠矣、盛德至善、後人不能忘之。君子賢其賢、如堯舜文武之德、後世尊仰之、豈非賢其所賢乎。親其親、如周

后稷之德、子孫宗之、以爲先祖先父之所自出、豈非親其所親乎。 禹

〔校勘〕

○「周后稷」朝鮮古寫本は「周之后稷」に作る。

○「先父」朝鮮古寫本は「先公」に作る。

〔訳〕

「前王忘れず」云々について質問した。先生のお答え。「前王の徳は遠い存在だけれども、その盛徳が至善であるので、後の人は忘れることはできないということだ。「君子は其の賢を賢とす」とは、たとえば堯・舜・文王・武王の徳は、後世に至るまで尊仰されている。これがその賢であるものを賢とすることではなくてなんであるろう。「其の親を親とす」とは、たとえば周の後稷の徳を、子孫がたつとび、先祖父がそこから出るものであると考えるようなもので、これが自らの親族を親しむということではなくてなんであるろう。」徐禹録

(1)「前王不忘云々」『大學章句』傳三章「詩云、於戲前王不忘。君

子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。」朱注「詩、周頌烈文之篇。於戲、歎辭。前王謂文武也。君子、謂其後賢後王。小人、謂後民也。此言前王所以新民者、止於至善、能使天下後世無一物不得其所。所以既沒世而人思慕之、愈久而不忘也。此兩節咏歎淫泆、其味深長、當熟玩之。」『毛詩』周頌「烈文」

毛傳「前王武王也。」鄭箋「於乎先王、文王武王。」

(2)「前王遠矣」前王の徳が遠く現在まで続いていること。『春秋左氏傳』昭公元年「劉子曰。美哉禹功、明德遠矣。微禹、吾其魚乎。吾與子弁冕端委、以治民臨諸侯、禹之力也。子盍亦遠績禹功、而大庇民乎。」正義「遠績禹功者、勸之爲大功、使遠及後世、若大禹也。謂勸武何不遠慕大禹之績、而立大功以庇民也。」

(3)「盛徳」『大學章句』傳三章「盛徳至善、民之不能忘也。」『周易』繫辭上傳「日新之謂盛徳。」

(4)「後人」『尚書』「君奭」「我不以後人迷。」正義「我不用使後世人迷惑、故欲教之也。」

(5)「賢賢」『論語』「學而」「子夏曰。賢賢易色。」

(6)「親親」『中庸章句』二〇章「凡爲天下國家有九經、曰、脩身也、尊賢也、親親也、敬大臣也、體群臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也。」

(7)「文武之徳」『中庸章句』一八章「武王末受命、周公成文武之徳、追王大王王季、上祀先公以天子之禮。」

(8)「后稷之徳」周頌「思文」「思文后稷、克配彼天。」同詩末句鄭箋「書說、烏以穀俱來、云穀紀后稷之徳。」正義「書說烏以穀俱來、云穀以記后稷之徳者、尚書旋機鈴及合符后皆有此文。注云、稷好農稼、今烏銜穀、故云記之也。」『詩集傳』周頌「思文」「思文、后稷配天也。周頌有祭天之詩三焉。其一曰：其二曰：其三曰思文。后稷配天、此所謂郊稷禘其祖之所自出而以其祖配之者也。」

45条

問。君子賢其賢而親其親。曰。如孔子仰文武之德、是賢其賢。成康以後、思其恩而保其基緒、便是親其親。 木之

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔訳〕

「君子は其の賢を賢として其の親に親しむ」について質問した。先生のお答え。「たとえば孔子が文王・武王の徳を尊仰したのが、「其の賢を賢とす」だ。成王・康王以後の子孫が、その恩を思つてその基礎を築いた業績を保とうとしたのが、「其の親に親しむ」だ。」 錢木之録

〔注〕

- (1) 「孔子仰文武之徳」『中庸章句』三〇章「仲尼祖述堯舜、憲章文武。」同一八章「武王末受命、周公成文武之徳。」「禮記」「孔子問居」 「孔子曰。其在詩曰。嵩高惟嶽、峻極于天。此文武之徳也。」
- (2) 「思恩」『文選』卷四七、陸機「漢高祖功臣頌」「俯思舊恩、仰察五緯。」
- (3) 「基緒」『尚書』「太甲」上「肆嗣王丕承基緒。」孔傳「子孫得大承基業。」

46条

或問至善章。曰。此章前三節是説止字、中一節説至善。後面烈文一節、又是咏歎此至善之意。 銖

〔校勘〕

○「中一節」朝鮮古寫本は「中節」に作る。

〔訳〕

ある人が「至善」の章について質問した。先生のお答え。「この章は、最初の三節は「至善に止まる」のなかの「止」字について説明し、あいだの一節が「至善」を説明している。そのあとの「烈文」の一節は、これに加えてこの至善の意味するものを詠嘆しているのだ。」 董銖録

〔注〕

- (1) 「前三節云々」前三節は「詩云邦畿千里……詩云縉蠻黃鳥……詩云穆穆文王……」の三節、中一節は「詩云瞻彼淇澳……」の一節、烈文一節は「詩云於戲前王不忘……」の一節。

傳四章釋本末

47条

問。聽訟吾猶人也、必也使無訟乎。曰。固是以修身爲本、只是公別底言語多走作。如云凡人聽訟、以曲爲直、以直爲曲、所以人得以盡其無實之辭、聖人理無不明、明無不燭、所以人不敢如此、却是聖人善聽訟、所以人不敢盡其無實之辭、正與經意相反。聖人正是說聽訟我也無異於人、當使其無訟之可聽、方得。若如公言、則當云聽訟吾過人遠矣、故無情者不敢盡其辭、始得。聖人固不會錯斷了事。只是它所以無訟者、却不在於善聽訟、在於意誠心正、自然有以薰炙漸染、大服民志、故自無訟之可聽耳。如成人有其兄死而不爲衰者、聞子臯將至、遂爲衰。子臯何嘗聽訟、自有以感動人處耳。 侗

〔校勘〕

○「修身」 成化本、萬曆本、朝鮮古寫本、和刻本は「脩身」に作る。

○「過人遠矣」 朝鮮古寫本は「矣」字がない。

○「無情者不敢」 成化本は「不」字の部分を空格とする。

○「不爲衰」 萬曆本は「衰」を「哀」に作る、下の「衰」も同じ。朝鮮古寫本は「不爲之衰」に作る。

○「子臯何嘗聽訟」 朝鮮古寫本は「子臯」の下に「又」字があり、「聽訟」の下に「了致然只是」の五字がある。

○「處耳」 朝鮮古寫本は「處故耳」に作る。

〔訳〕

「訟を聴くは吾れ猶お人のごときなり。必ずや訟無からしめんや。」を問うた。先生がおっしゃった。「当然「修身を以て本と爲す」のであるが、しかし君の解釈の別の箇所は逸脱しているところが多い。もし「凡人が訴訟を扱うときには、曲がっているものをまっすぐだとし、まっすぐなものを曲がっているとしてしまうので、だから当事者とその内実を伴わないことはで主張を通させてしまうことになるのだ。聖人は明らかにしない理はなく、その明知はすべてのことを照らすので、だから当事者が虚偽の申し立てをできなくなるのだ。」と書いてしまうと、聖人が訴訟の扱いを上手にするから当事者が内実を伴わない言葉で主張を通そうとはしないのだ、ということになってしまいい、それではまさしく経文の意味とは反対になってしまう。聖人がここでまさに言わんとしているのは、「訴訟の扱いについては自分も人とはまったく異なるのであり、聴くべき訴訟が無くなるようにすべきなのだ。」ということなのであって、そのように理解してこそはじめて通じるのだ。もし君の言うような意味だとするならば、経文は「訟を聴くは吾れ人に過ぎたること遠し。故に情無き者は敢て其の辞を尽くさず」となっていて始めて合致する。聖人はもちろん事柄の処断を誤ったりすることはあり得ない。しかし、聖人が「訟無し」とする理由は、訴訟をうまく処理するということが問題ではなく、「意誠、心正」ということが肝要なのであり、そうすれば自然と聖人の薫陶がしだい

に浸透していつて、おおいに人々を心服させていくから、だから自然と断決すべき訴訟などなくなっていくのである。たとえば「成の国に兄が死んでも喪服をつけなかった男がいた。男は子臯が長官としてやってくるということを開きつけた。かくてその男は喪服をつけた」という話があるが、これは子臯が訴訟を処理したわけではない。おのずと人の心を動かすことがあったということなのだ。」沈憫録

〔注〕

(1) 「問」 ここで質問者はおそらく、この『大学』の文章について漠然と質問したのではなく、朱子の言及からもわかるように、自身の解釈を語った上で質問したのである。『大學章句』伝四章「子曰。聴訟、吾猶人也、必也使無訟乎。無情者不得盡其辭、大畏民志、此謂知本。」朱注「猶人、不異於人也。情、實也。引夫子之言、而言聖人能使無實之人不敢盡其虛誕之辭。蓋我之明德既明、自然有以畏服民之心志。故訟不待聽而自無也。觀於此言、可以知本末之先後矣。」「論語」「顔淵」「子曰。聴訟、吾猶人也。必也使無訟乎。」集注「范氏曰。聴訟者、治其末、塞其流也。正其本、清其源、則無訟矣。楊氏曰。子路片言可以折獄、而不知以禮遜爲國、則未能使民無訟者也。故又記孔子之言、以見聖人不以訟爲難、而使民無訟爲貴。」なお、この聴訟の解釈を朱子は「新民」に関係づけて説いている。『大学或問』「是以雖其聴訟無以異於衆人、而自無訟之可聴。蓋己德既明、而民德自新、則得其本之效也。或不能然而欲區區於分爭辨訟之間、以求新民之效、其亦末矣。」

(2) 「以修身爲本」 『大學章句』經「自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。」

(3) 「只是」 しかし。なのに。軽い転折。

(4) 「走作」 横道にされること。『語類』卷一二六、四七条、葉賀孫録(Ⅷ 3018)「言釋氏之徒爲學精專、曰。便是某常説、吾儒這邊難得如此。看他下工夫、直是自日至夜一念走作別處去。」

(5) 「明無不燭」 『藝文類聚』卷一四、沈約「齊明帝諡議」「崢嶸之下、澤靡不懷。寥廓之上、明無不燭。」

(6) 「薰炙」 薰陶を受ける。『韓詩外傳』卷六「名聲足以薰炙之、威強足以一齊之。」

(7) 「成人有其兄云々」 『禮記』檀弓「下」成人有其兄死而不爲衰者、聞子臯將爲成宰、遂爲衰。」正義「子臯、孔子弟子。」なお「衰」は、喪服のうち、上半身に身につけるものを指すが、ここでは喪服のこと。『礼記』「喪服」「斬衰裳。」鄭注「服、上曰衰、下曰裳。」

48条

使他無訟、在我之事、本也。恁地看、此所以聴訟爲末。 泳

〔校勘〕

○「爲末」 朝鮮古寫本は「之本」に作る。

〔訳〕

当事者に訴訟を起こさせないようにするというのは、わたし自身
ありようが問題になる話であって、「本」である。そう考えれば、訴
えを聴いて評決をすることは「末」だということになる。 湯泳録

〔注〕

〔1〕「此所以」 同様の表現は『語類』卷三、一九条、李閔祖録(13)「人
將死時、熱氣上出、所謂魂升也。下體漸冷、所謂魄降也。此所以
有生必有死、有始必有終也。夫聚散者氣也。若理則只泊在氣上、
初不是凝結自爲一物。」

49条

無情者不得盡其辭、便是說那無訟之由。然惟先有以服其心志、所以
能使之不得盡其虛誕之辭。 義剛

〔校勘〕

○「惟先」 朝鮮古写本は「惟是先」に作る。

〔訳〕

実情のないものにそのうそを主張をさせない、というのはつまり、
例の「訴訟がなくなる」という理由を説明しているのだ。しかしなが
ら、ただまず先に民の気持ち信服させてこそ、民にその虚誕の
主張を通させないようにできるのだ。 黄義剛録

〔注〕

〔1〕「虚誕」『禮記』「中庸」の鄭玄注に既に「無實者、多虚誕之辭。」
と見え、朱子もそれに従っている。四七条注(11) 参照。

50条

大畏民志者、大有以畏服斯民自欺之志。 卓

〔校勘〕

○諸本異同なし

〔訳〕

おおいに民の志を畏れさせる、というのは、この民が自らを欺いて
しまうという心の動きを大いに畏れ服さしめるということだ。 黄卓
録

〔注〕

〔1〕「畏服」「畏」を「畏服」とするのは、衛湜『禮記集説』卷一五一「横
渠張氏曰。大畏民志、大畏服其民志。」朱子も同様に章句におい
て「自然有以畏服民之心志。」としている。四七条注(1) 参照。
〔2〕「斯民」『孟子』「萬章」上「子將以斯道覺斯民也。」
〔3〕「自欺」『大學章句』第六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡

臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也。」朱注「自欺云者、知爲善以去惡、而心之所發有未實也。」

傳五章釋格物致知

51条

劉圻父說。人心之靈、莫不有知、而天下之物、莫不有理。恐明明德便是性。曰。不是如此。心與性自有分別。靈底是心、實底是性。靈便是那知覺底。如向父母則有那孝出來、向君則有那忠出來、這便是性。如知道事親要孝、事君要忠、這便是心。張子曰。心統性情者也。此說得最精密。

次日、圻父復說過。先生曰。性便是那理。心便是盛貯該載、敷施發用底。

問。表裏精粗無不到。曰。表便是外面理會得底。裏便是就自家身上至親至切、至隱至密、貼骨貼肉處。今人處事、多是自說道、且恁地也不妨。這箇便不是。這便只是理會、不會到那貼底處。若是知得那貼底時、自是決然不肯恁地了。 義剛 子實同

〔校勘〕

- 「恐明明德便是性」 朝鮮古写本は「恐」を「云」に作る。
- 「曰不是如此」 朝鮮古写本は「曰」を「先生曰」に作る。

- 「盛貯該載」 万曆本、和刻本は「該」を「諫」に作る。
- 「貼骨貼肉處」 朝鮮古写本は「貼骨皮底」に作る。
- 「這箇便不是」 万曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
- 「義剛 子實同」 朝鮮古写本には「子實同」の三字なし。

〔訳〕

劉圻父が述べた。「人の心という靈なるものには必ず知が具わっており、天下の物には必ず理が具わっている。」（『大学章句』伝五章）と有ります。恐らく、明德を明らかにすればそれが性だ、ということでしょうか。」先生「そういうことではない。心と性とは自ずと区別がある。靈なるもの（＝虚靈）が心であり、実なるもの（＝実理）が性である。靈とは、かの知覚する主体である。たとえば父母に対しては、かの孝が生ずる、主君に対しては、かの忠が生ずる、という場合、その生じてくるものが性だ。たとえば親に事えるには孝であるべし、君に事えるには忠であるべしと認識する場合、その認識する主体が心だ。張子は「心は性情を統ぶるものなり。」と言った。この命題は極めて精密である。」

翌日、圻父は（同じ話題に）再び言及した。先生「性とは、かの理に他ならない。心とは、（理をその中に）収蔵し搭載し、（理を）あまねく作用させ発現させるものだ。」

「表裏精粗、到らないところはない。」（『大学章句』伝五章）についてお尋ねした。先生「表とは、外面的な取り組むべき事柄だ。裏とは、自己の身における、極めて親身で極めて切実、極めて隠奥で極めて深

密、骨に徹し肉に徹するところである。今の人が事に処する場合、大概は「とりあえずはこの程度でも構わないだろう」等と言う。しかしそんなのはだめだ。そんなのでは、ただ単に取り組みました、というだけのことであって、かのことんところまでには全く至っていない。もしもかのことんまで認識が及んでいたらはずと、そんな（おざなりな）態度は断じてとろうとはしなかつたはずだ。黄義剛録 劉子寰録も同じ

〔注〕

(1) 「劉圻父」 劉子寰、字圻父。『朱子語録姓氏』所収。ただし『朱子語録姓氏』諸本のうち、成化本、万曆本、呂留良本、伝経堂本、和刻本は全て「字所父」に作り、朝鮮整版本のみ「字圻父」に作る。なお『考亭淵源録』卷二三及び『朱子実紀』卷八はともに「字圻父」に作る。

(2) 「人心之靈、莫不有知」云々。『大学章句』伝五章「所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈、莫不有知、而天下之物、莫不有理。惟於理有未窮、故其知有不盡也。」

(3) 「恐明明德便是性」 「明德を明らかにすれば、それが性ではないだろうか。」明明徳の営みによって気稟物欲を払拭すれば、天命の性を回復し得るはずだ、というのが質問者の発言の趣旨であろう。同方向の内容を示す資料を挙げておく。卷一四、一一五条、湯泳録「明德、是我得之於天、而方寸中光明底物事。統而言之、仁義禮智。以其發見而言之、如惻隱・羞惡之類。以其見於實用言之、

如事親・從兄是也。如此等徳、本不待自家明之。但從來爲氣稟所拘、物欲所蔽、一向昏昧、更不光明。而今却在挑剔揩磨出來、以復向來得之於天者、此便是明明徳。」本条において、この質問者の発言に對して朱熹が否定的なのは、明德と心・性の關係を問題にしたからだと思われる。明德と心・性の關係については〔補説1〕を参照。

(4) 「心與性自有分別」 『語類』卷四、三九条、黄勝録（I 28）「若是指性來做心説、則不可。今人往往以心來說性。須是先識得、方可説。（必大録云。若指有知覺者爲性、只是説得心字。」同、卷五、六〇条、楊道夫録（I 30）「景紹問心性之別。曰。性是心之道理、心是主宰於身者。」

(5) 「靈底是心」 『語類』卷五、二三条、陳淳録（I 35）「問。靈處是心、抑是性。曰。靈處只是心、不是性。性只是理。」同、二七条、甘節録（I 35）「所覺者、心之理也。能覺者、氣之靈也。」同、二八条、甘節録（I 35）「心者、氣之精爽。」同、二九条、呂燾録（I 35）「心官至靈、藏往知來。」

(6) 「實底是性」 『語類』卷四、三九条、黄勝録（I 28）「蓋性中所有道理、只是仁義禮智、便是實理。吾儒以性爲實、釋氏以性爲空。」同、卷五、一四条、廖德明録（I 35）「性是實理、仁義禮智皆具。」同、四五条、林学蒙録（I 35）「或問心性之別。曰。…性雖虛、都是實理。心雖是一物、却虛、故能包含萬理。…（方子録云。性本是无、却是實理。心似乎有影象、然其體却虛。）」

(7) 「靈便是那知覺底」 「知覺底」は、知覺する者、知覺する主体、即ち心を指す。『語類』卷二〇、九六条、程端蒙録（II 25）「知覺

便是心之徳。」同、卷六〇、五四条、襲盖脚録（IV 1432）「問。合虚與氣有性之名、合性與知覺有心之名。曰。虚只是說理。横渠之言、大率有未盡處。有心則自有知覺、又何合性與知覺之有。」なお、知覺するのは心であつて性ではない。知覺を性とする見解を朱熹は明確に否定する。『語類』卷五九、七条、潘植録（IV 1376）「問。生之謂性。曰。告子只說那生來底便是性。手足運行、耳目視聽與夫心有知覺之類。他却不知生便屬氣稟。」

(8) 「如知道事親要孝、事君要忠、這便是心」『語類』卷七八、一九三条、蕭佐録（V 2010）「道心是知覺得道理底。人心是知覺得聲色臭味底。」

(9) 「心統性情者也」『張載集』拾遺、性理拾遺「張子曰。心統性情者也。」

(10) 「此說得最精密」『語類』卷一八、八二条、沈憫録（II 11）「後來横渠說得極精。云、心統性情者也。」同卷五九、四三条、周諷録（IV 136）「故横渠云。心統性情者也。此說最爲當。」

(11) 「性便是那理」『河南程氏遺書』卷一八、七二条「性即是理。」同、卷二二上、七一条「性即理也。」『語類』卷五、七〇条、劉砥録（I

93）「伊川性即理也、横渠心統性情、二句、顛撲不破。」

(12) 「心便是盛貯該載」邵雍『擊壤集』序「性者道之形體也、性傷則道亦從之矣。心者性之郭廓也、心傷則性亦從之矣。身者心之區宇也、身傷則心亦從之矣。物者身之舟車也、物傷則身亦從之矣。『語類』卷四、三九条、黄魯録（I 96）「又曰。邵堯夫說、性者道之形體、心者性之郭廓。此說甚好。蓋道無形體、只性便是道之形體。然若

無箇心、却將性在甚處。須是有箇心、便收拾得這性、發用出來。」同、卷五、六四条、黄義剛録（I 91）「曰。若以穀譬之、穀便是心、那爲粟爲菽爲禾爲稻底、便是性。康節所謂心者性之郭廓、是也。包裹底是心、發出不同底是性。」同、四八条、林夔孫録（I 88）「性是理、心是包含該載、敷施發用底。」

(13) 「敷施發用底」類似の表現については前注所引参照。「敷施」は、あまねく施す、まねく行ふ。『書経』皋陶謨「翁受敷施、九徳成事、俊又在官。」孔安国伝「翁、合也。能合受三六之徳而用之、以布施政教、使九徳之人皆用事。謂天子如此、則俊徳治能之士並在官。」理が発現する場は心である、とする見解に関しては以下を参照。『語類』卷一八、九七条、呂燾録（II 416）「蓋理雖在物而用實在心也。…然則理之體在物而其用在心也。」

(14) 「表裏精粗」『大学章句』伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」「表裏精粗」については「補説2」を参照。

(15) 「貼骨貼肉處」骨肉に徹する、骨身にしみる。「貼」は、張り付く、ぴったりくっつく、密着する。次の条では「貼肉」は、文字通り「肌に密着する」の意で用いられている。『語類』卷二九、一一二条、沈憫録（II 54）「問。夫子安仁、顔淵不違仁、子路求仁。曰。…然都是去得箇私意了。只是有粗細。子路譬如脫得上面兩件麤糟底衣服了。顔子又脫得那近裏面底衣服了。聖人則和那裏面貼肉底汗

衫都脫得赤骨立了。」

(16) 「且恁地也不妨」とりあえずはこの程度でも構わないだろう。

「恁地」は文言の「如此」に同じ。「也」は、…も、…でも。「不妨」は、差し支えない、構わない。

(17) 「不會到那貼底處」「貼底處」は、底に着くところ、徹頭徹尾。

「到那貼底處」は、とことんまで至る、徹底的にやり通す。『語類』

卷七四、一六一條、踊淵錄(V 1906)「地卑、便會廣。世上更無卑似地底。又曰。地卑、是從貼底謹細處做將去、所以能廣。」

〔補説1〕「明德と心・性」

明德と心・性の関係は、如何に把握すべきか。この点に関する朱熹の見解は、実は必ずしも明示的ではない。

① 『語類』卷一四、六五條(記録者名欠)「或問。明德便是仁義禮智之性否。曰。便是。」

② 同、卷一四、一一五條、湯泳録「明德、是我得之於天、而方寸中光明底物事。統而言之、仁義禮智。以其發見而言之、如惻隱・羞

惡之類。」(注(3)既引)

③ 同、卷五、四四條、余大雅錄(188)「朱熹曰。『明德合是心、合是性。』曰。『性却實。以感應虛明言之、則心之意亦多。』(朱熹)

曰。「此兩箇、說著一箇、則一箇隨到、元不可相離、亦自難與分別。捨心則無以見性、捨性又無以見心。…」

④ 同、卷一四、八五條、呂燾錄(1)「但要識得這明德是甚物事、便

切身做工夫、去其氣稟物欲之蔽。能存得自家個虛靈不昧之心、足以具衆理、可以應萬事、便是明得自家明德了。」

①や②は、明德を性と見なす資料であると判断できるだろう。因みに②に対する訳注において、三浦國雄氏も、「明德は性に置換される」云々との解説を施しておられる(『朱子語類』抄)頁一八一)。

一方③は、「明德は性よりもむしろ心と見なすべきではないか」という趣旨の門人の発言が、必ずしも否定されていない。そして④は、「虚靈不昧之心」云々の表現と明德に対する朱熹の概念規定(『大学章句』経、朱注「明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。）」とを照合すれば、明德を心と見なす朱熹の立場が看取される。本条でも、「虚靈是心、實底是性」という朱熹の発言から判断すれば、「明德(虚靈不昧)は心である」とする立場を読み取っておくべきだろう。

なお朝鮮の朱子学者韓元震(一六八二—一七五〇)の『朱子言論同異攷』卷二「心性情」にこの点に関する記述があるので以下に引いておく(ソウル大学校奎章閣蔵本、括弧内は引用者による補足)。

大學明德註曰。虚靈不昧、以具衆理而應萬事(『大学章句』経、朱注)。孟子盡心註曰。心者人之神明、所以具衆理而應萬事(『孟子集注』「尽心」

上、朱注)。答潘謙之書曰。心之知覺、所以具此理而行此情(『朱文公文集』卷五五「答潘謙之」第一書)。三言之訓、無一字不同。而所謂虚靈・神明・知覺、又是一般名心之語、則明德只是心、心即是明德者、可見矣。(双行原注)心與明德雖非二物、其稱名則不同。謂之心、則并舉氣稟。故人不能皆同。謂之明德、則只指其光明而不及其氣稟、故人不能有異。

此又不可不知也。

〔補説2〕「表裏精粗」

『大学章句』伝五章には「衆物之表裏精粗」とあり、後出の五四条には「理之表裏精粗」「理固自有表裏精粗」との表現が見えるが、いずれも同趣旨。物に内在する理の二側面、即ち「所当然之則」と「所以然之故」とを、それぞれ「表・粗」と「裏・精」で表現したものである。

『大学或問』「至於天下之物、則必各有所以然之故與其所當然之則。所謂理也。人莫不知、而或不能使其精粗隱顯、究極無餘、則理所未窮。」

『大学或問』「自其一物之中、莫不有以見其所當然而不容已、與其所當然而不可易者。必其表裏精粗、無所不盡、而又益推其類以通之。至於一日脫然而貫通焉、則於天下之物、皆有以究其義理精微之所極、而吾之聰明睿智、亦皆有以極其心之本體而無不盡矣。」

「所当然之則」とは、例えば「親に事えるには孝であるべし」「兄に事えるには悌であるべし」がこれに当たり、「所以然之故」とは「親に事えるには何故に孝であるべきか」「兄に事えるには何故に悌であるべきか」がこれに当たる。『語類』卷一八、九三条、周諷録(Ⅱ)問。或問。物有當然之則、亦必有所以然之故、如何。曰。如事親當孝、事兄當弟之類、便是當然之則。然事親如何却須要孝、從兄如何却須要弟、此即所以然之故。」

『語類』卷一八、九四条、輔広録(Ⅱ)問。「或問。莫不有以見其所當然而不容已、與其所以然而不可易者。先生問。每常如何看。廣曰。所

以然而不可易者、是指理而言、所當然而不容已者、是指人心而言。曰。下句只是指事而言。凡事、固有所當然而不容已者、然又當求其所以然者何故。其所以然者、理也。…今之學者、但止見一邊。…且如爲忠爲孝、爲仁爲義、但只據眼前理會得箇皮膚使休、都不曾理會得那徹心髓處。」

卷一六、五一条と卷一八、九四条の所説を合わせれば、以下のように整理できるだろう。

・表粗——外面理會得底
 裏精——就自家身上至親至切至隱至密、貼骨貼肉處——徹心徹髓處
 ——眼前理會得箇皮膚——所當然

因みに後出の五六条には「表者、如父慈子孝。」とあり、五五条には「須是表裏精粗、無不到。有一種人、只就皮殼上做工夫、却於理之所以然者、全無是處。」とある。これも、「表粗——所当然」「裏精——所以然」という対応関係の証左となる資料である。

「今人處事、多是自說道、且恁地也不妨。」云々とは、当為(「所当然之則」を当為として認識するのみで、なぜそうしなければならぬのかという理由(「所以然之故」)に対する切実な認識が欠如する場合、人は往々にしておざりな態度に墮してしまうことを述べたもの。

なお「表裏精粗」に関しては佐野公治『四書学史の研究』(創文社、一九八八年)四五頁以下、吾妻重二『朱子学の新研究』(創文社、二〇〇四年)三二五頁以下にそれぞれ詳細な考察がある。

52条

問。因其已知之理推而致之、以求至乎其極。是因定省之孝以至於色難養志、因事君之忠以至於陳善閉邪之類否。

曰。此只說得外面底。須是表裏皆如此。若是做得大者而小者未盡、亦不可。做得小者而大者未盡、尤不可。須是無分毫欠闕、方是。

且如陸子靜說、良知良能、四端根心。只是他弄這物事。其他有合理會者、渠理會不得、却禁人理會。鵝湖之會、渠作詩云。易簡工夫終久大。彼所謂易簡者、苟簡容易爾、全看得不子細。

乾以易知者、乾是至健之物、至健者、要做便做、直是易。坤是至順之物、順理而爲、無所不能、故曰簡。此言造化之理。至於可久則賢人之德、可久者、日新而不已。可大則賢人之業、可大者、富有而無疆。易簡有幾多事在、豈容易苟簡之云乎。 人傑

〔校勘〕

○「問因其已知之理」朝鮮古写本は「問」の下に「先生所補格物章云」の八文字有り。

○「此言造化之理」朝鮮古写本には「言」字がない。

○「人傑」朝鮮古写本にはこの下に双行小注が有り、鵝湖の会における陸九淵詩の全文が引用されている（今、句読点を補う。「按陸詩云。墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心。涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業竟浮沉。欲知自下升高處、真偽先須辨只今。」

〔訳〕

質問「自分が已に知った理に拠ってそれを推し極めていき、その極処にまで至ることを求める」（『大学章句』伝五章）について。これは、定（夜には寢床を整える）や省（朝にはご機嫌を伺う）による孝から更に進んで、色難し（孝子の真情がその動作容貌に自ずと現れ出ることこそが難しい）や養志（父母の志のあるところを汲んで父母にお事えする）というところまで至り、（単に）主君にお事えするということから更に進んで、善を陳べて邪を閉ざす（主君に善道を述べ勧めめて邪悪に陥ることを防ぐ）というところまで至る、というたぐいのことでしょうか。」

先生「君が挙げているのは外面的な事柄（＝表・粗に属する事柄）に過ぎない。是非とも表裏全てにわたってそうあるべきなのだ。仮に大きなもの（大綱）の方はできていても小さなもの（個別の道理）の方に遺漏があるとすれば、それもだめだ。小さなものの方ではできていても大きなものの方に遺漏があるとすれば、それは一番だめだ。是非とも（表裏にわたって）毛筋ばかりの欠落もない、ということであって、それでこそよいのだ。

例えば陸子静は「良知良能」を説き、「四端は心に根ざす」と説く。彼は単にそれらのもの（良知良能や四端）を弄んだだけに過ぎない。それ以外にも取り組むべき事柄はあるのに、彼はそれらに取り組むことができなかったばかりか、人がそれらに取り組むことを禁じさせたのだ。鵝湖の会に際して彼が作った詩に云う。「易簡の工夫は終に久大なり。」しかし彼が言うところの易簡とは、苟簡で容易おざなりたやすということに過ぎないのであって、全くもってとらえ方が緻密ではないのだ。

「乾は易を以て知る」とは、乾はこの上なく健（剛健）なるものであつて、この上なく健であるからには、やろうと思つたことは直ちに成し遂げてしまい、全くもつて「易」なのだ。坤はこの上なく順（柔順）なるものであつて、理に順つて為すから、できないことはなく、それ故に「簡」と言うのだ。これは造化の理を述べたものである。「久遠に持続することができれば、それは賢人の徳である」という語の、久遠に持続することができるとは、日々新たにしていまないとこととだ。「広大たり得れば、それは賢人の業である」という語の、広大たり得るとは、全てを内に包含して辺際がないということだ。「易簡」には一体いかばかり（多く）の事柄が含まれていることであろうか。それが一体どうして容易苟簡の意などであり得ようか。 萬人傑録

〔注〕

- (1) 「因其已知之理」云々 『大学章句』伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。」
- (2) 「定省之孝」 『礼記』「曲礼」上「凡爲人子之禮、冬温而夏清、昏定而晨省。」鄭玄注「安、定其牀衽也。省、問其安否何如。」
- (3) 「色難」 『論語』為政「子夏問孝。子曰。色難。有事、弟子服其勞。有酒食、先生饌。曾是以爲孝乎。」朱注「食音嗣。色難、謂事親之際、惟色爲難也。食、飯也。先生、父兄也。饌、飲食之也。曾、猶嘗也。蓋孝子之有深愛者、必有和氣。有和氣者、必有愉色。有愉色者、必有婉容。故事親之際、惟色爲難耳。服勞奉養、未足爲孝也。舊說、承順父母之色爲難、亦通。」

- (4) 「養志」 『孟子』「離婁」上「孟子曰。事孰爲大。事親爲大。：曾子養曾皙、必有酒肉。將徹、必請所與。問有餘、必曰有。曾皙死、曾元養曾子、必有酒肉。將徹、不請所與。問有餘、曰亡矣、將以復進也。此所謂養口體者也。若曾子、則可謂養志也。事親若曾子者、可也。」朱注「曾皙、名點、曾子父也。曾元、曾子子也。曾子養其父、每食必有酒肉。食畢將徹去、必請於父曰。此餘者與誰。或父問此物尚有餘否、必曰有。恐親意更欲與人也。曾元不請所與。雖有言無。其意、將以復進於親、不欲其與人也。此但能養父母之口體而已。曾子則能承順父母之志而不忍傷之也。」

- (5) 「事君之忠」 『論語』「八佾」「定公問。君使臣、臣事君、如之何。孔子對曰。君使臣以禮、臣事君以忠。」『孝經』「士章」「故以孝事君則忠、以敬事長則順。」『礼記』「祭義」「事君不忠、非孝也。」

- (6) 「陳善閉邪」 『孟子』「離婁」上「故曰。責難於君謂之恭、陳善閉邪謂之敬、吾君不能謂之賊。」本卷二八条に既出。

- (7) 「做得大者而小者未盡」「做得小者而大者未盡」後出の五四条には「表・粗——下面許多——細下工夫」「裏・精——上面一截——大體」と整理し得るような発言が見られる。また『語類』卷三四、一五九条、董銖録(Ⅲ 883)には「道有大小精粗。大者精者、固道也。小者粗者、亦道也。觀中庸言、大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、峻極於天、此言道之大處。優優大哉、禮儀三百威儀三千、是言道之小處。」とある。これらを踏まえてここでは、「表・粗——小物——多くの個別的な行為」「裏・精——大者——大綱(當爲の當爲たる所以)」という方向で理解しておく。

(8)「須は無分毫欠闕、方是」「須是…方是」は、ぜひとも…であって、それでこそよい。

(9)「且如陸子靜說」云々 陸九淵(字子靜、号象山、一一三九～一一九三)『陸九淵集』卷一「與曾宅之」「孟子曰。所不慮而知者、其良知也。所不學而能者、其良能也。此天之所與我者。我固有之。非由外鑠我也。」同、卷二「與陶贊仲」「孟子曰。仁義禮智根於心。其生色也、然見於面、施於背、施於四體、四體不言而喻。」(前者は『孟子』「尽心」上に拠る。後者も同じく『孟子』「尽心」上からの引用。)

(10)「其他有合理會者、渠理會不得、却禁人理會」以下に示す通り朱熹は、「陸九淵は自己の内面・涵養のみを重視し外面・省察を軽視する」「専ら生知安行のみに立脚して学知以下を無視する」「門人に讀書させない」「陸九淵門下は窮理に取り組まない」等と批判している。いずれも『語類』卷一二四。二七条、湯泳録(Ⅷ 2974)「聖賢之教、無内外本末上下。今子靜、却要理會内、不管外面。」二八条、滕璘録(Ⅷ 2974)「陸子靜云、涵養は主人翁、省察は奴婢。」三七条、黄管録(Ⅷ 2976)「今陸氏、…只是專主生知安行、而學知以下、一切皆廢。又只管理會一貫、理會一。」四七条、沈侗録(Ⅷ 2978)「因坐中有江西士人問爲學、曰。公們都被陸子靜誤、教莫要讀書、誤公一生。」五八条、廖德明録(Ⅷ 2984)「從陸子靜學、如楊敬仲輩、持守得亦好、若肯去窮理、須窮得分明。然它不肯讀書、只任一己私見、有似箇稊稗。」(楊敬仲は楊簡、稊稗は穀物に似た雑草、まがごもの)

(11)「鵝湖之會」淳熙二年(一一七五)、鵝湖寺(江南東路信州鉛山県)

において、呂祖謙(字伯恭、号東萊)の仲介により、朱熹と陸九淵(字子壽、号復齋)・陸九淵(字子靜、号象山)兄弟が対面し、学問の異同をめぐる討論した。『陸九淵集』卷三六「年譜」淳熙二年(一一七五)乙未先生三十七歳条「呂伯恭約先生與季兄復齋、會朱元晦諸公于信之鵝湖寺。…鵝湖之會、論及教人。元晦之意、欲令人泛觀博覽而後歸之約。二陸之意、欲先發明人之本心而後使之博覽。朱以陸之教人爲太簡。陸以朱之教人爲支離。此頗不合。」

(12)「易簡工夫終久大」『陸九淵集』卷二五「鵝湖和教授兄韻」「墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心。涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業竟浮沈。欲知自下升高處、真偽先須辨只今。」

(13)「乾以易知」云々 『易經』「繫辭上伝」「乾道成男、坤道成女。乾知大始、坤作成物。乾以易知、坤以簡能。」朱熹『周易本義』「知猶主也。…乾、健而動、即其所知便能始物、而无所難、故爲以易而知大始。坤、順而靜、凡其所能皆從乎陽而不自作、故爲以簡而能成物。」

(14)「乾是至健之物」云々 『易經』「說卦伝」「乾、健也。坤、順也。」同「繫辭下伝」「夫乾、天下之至健也、德行恆易以知險。夫坤、天下之至順也、德行恆簡以知阻。」朱熹『周易本義』「至健則所行无難、故易。至順則所行不煩、故簡。然其於事皆有以知其難而不取易以處之也。是以其有憂患、則健者如自高臨下而知其險。順者

如自下趨上而知其阻。蓋雖易而能知險、則不陷於險矣。既簡而又知阻、則不用於阻矣。所以能危能懼而无易者之傾也。」

(15) 「直是易」「直是」は、全くもつて。本卷三七条に既出。

(16) 「此言造化之理」「繫辭上傳」のうち「乾道成男、坤道成女。」以下は、天地陰陽による造化の理を述べたもの、「易則易知、簡則易從。」以下は人の営為について述べたものである。次注を参照。

なお「造化之理」の用例については以下を参照。『北齊書』卷四五、文苑伝「樊遜」「臣聞：造化之理、既寂寞而無傳。報應之來、固難得而妄說。」「礼記」「中庸」孔穎達疏「道之至極、如造化之理、雖聖人、不知其所由。故云、及其至也、雖聖人、亦有所不知焉。」

(17) 「可久則賢人之德」「易経」「繫辭上傳」「易則易知、簡則易從。易知則有親、易從則有功。有親則可久、有功則可大。可久則賢人之德、可大則賢人之業。易簡而天下之理得矣。」朱熹『周易本義』「人之所爲、如乾之易、則其心明白而人易知。如坤之簡、則其事要約而人易從。易知則與之同心者多、故有親。易從則與之協力者衆、故有功。有親則一於内、故可久。有功則兼於外、故可大。徳謂得於己者。業謂成於事者。上言乾坤之徳不同、此言人法乾坤之道至此、則可以爲賢矣。」

(18) 「可久者、日新而已」「可大者、富有而無疆」「易経」「繫辭上傳」「盛徳大業、至矣哉。富有之謂大業、日新之謂盛徳。」「周易本義」張子曰。富有者、大而無外。日新者、久而無窮。」「ここで朱熹は「繫辭上傳」における「賢人之徳」と「盛徳」、「賢人之業」「大業」とを、

それぞれ対応させて理解している。なお「無疆」は『易経』「坤」象伝「坤厚載物、徳合無疆。」等。

(19) 「易簡有幾多事在」「在」は断定の語気を示す句末の助字。本卷五条に既出。

53条

任道弟問。致知章、前説窮理處云。因其已知之理而益窮之。且經文物格而后知至、却是知至在後。今乃云、因其已知而益窮之、則又在格物前。

曰。知先自有。才要去理會、便是這些知萌露。若懵然全不向著、便是知之端未曾通。才思量著、便這箇骨子透出來。且如做些事錯、才知道錯、便是向好門路、却不是方始去理會箇知。

只是如今須著因其端而推致之、使四方八面、千頭萬緒、無有些不知、無有毫髮窒礙。孟子所謂知皆擴而充之、若火之始然、泉之始達。擴而充之、便是致字意思。賀孫

〔校勘〕

○「任道弟問」朝鮮古写本は以下の「致知章前説窮理處云因其已知之理而益窮之且經文物格而后知至却是知至在後今乃云因」の部分
を双行小注とする。

○「日知先自有」朝鮮古写本、朝鮮整版本は「先」を「元」に作る。
朝鮮整版本卷末「考異」「元自有 元一作先、有一作亦」

○「才要去理會」朝鮮古写本は、本条に三出する「才」を全て「纔」に作る。

○「若懵然全不向著」朝鮮古写本は、本条に三出する「著」を全て「着」に作る。

○「便這箇骨子透出來」朝鮮古写本は、本条に二出する「箇」を全て「个」に作る。

○「知皆擴而充之」朝鮮古写本は、本条に二出する「擴」を全て「廣」に作る。

〔訳〕

弟の任道が質問した。「致知章（伝五章）では、前の方の窮理を説く箇所に、「其の已に知るの理に因りて益々これを窮む」とあります。そもそも経文に「物格りて后に知至る」とあるからには、「知至る」は「物格る」よりも）後に位置を占めることになるはずで、ところが今、「其の已に知るの理に因りて益々これを窮む」と言えば、「致知」が、格物よりも前に位置を占めることになってしまいます。」

先生「知が（格物に）先だつということも、当然に有るのだ。わざわざ（格物に）取り組もうとしたならば、それはつまりこの知が萌芽発現しているということなのだ。もしもほんやりして全く（格物の実践に）向かおうとしないのであれば、それはつまり知の端緒が全く現出していないということだ。わずかにでも（格物に取り組もうと）思うならば、それはつまり、知の核となる部分が現れ出しているということなのだ。たとえば何事かをやり損なつた場合、やり損なつたと氣

づいた途端、既にしてよりよい方法を目指すものなのであって、やり損なつて初めて「知」に取り組む、というわけではないのだ（＝ことさらに取り組むまでもなく、知は自ずとたちはたはたしている）。

（伝五章に話を戻せば）今はただ、是非ともその端緒（＝「已知之理」に即してそれを推し致るべきなのであって、あらゆる方面にわたって、ありとあらゆる情況に即して、些かたりとも知らぬ事はないようにし、毛筋ばかりも疑難がないようにすべきなのだ。孟子の所謂「四端の）全てを拡充することを知るべきであつて、それは火が燃え始めたようなもの、泉が湧き始めたようなものである。」であつて、ここでいう拡充こそ、まさに「致」字の趣旨に他ならないのだ。」葉賀孫録

〔注〕

（1）「任道弟」葉任道。葉賀孫の弟。卷一四、三三条、葉賀孫録にも「謂任道弟讀大學云」云々とある。同条注を参照。

（2）「因其已知之理而益窮之」『大学章句』伝五章「是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。」

（3）「物格而后知至」『大学章句』經。

（4）「若懵然全不向著」「懵然」は、不明、無知の様。『白氏長慶集』卷四五「與元九書」「然僕又自思、闕東一男子耳。除讀書屬文外、其他懵然無知。」「不向著」の「著」は、動作の持続をあらわす助字。

（5）「知之端」『孟子』「公孫丑」上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。」

(6) 「便這箇骨子透出來」「骨子」は眼目。核になるもの。「語類」卷六四、九九条、陳文蔚録(IV 158)「問。不誠無物。曰。誠、實也。且如人爲孝、若是不誠、恰似不會。誠便是事底骨子。」

(7) 「只是如今須著因其端而推致之」「如今」は、今。「須著」は、必ずしななければなれない、必ずすべきである。「因其端而推致之」に類似する表現として以下が有る。「大学章句」伝九章「康誥曰。如保赤子。心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。」朱注「此引書而釋之、又明立教之本不假強爲、在識其端而推廣之耳。」

(8) 「四方八面」あらゆる方面にわたって、つぶさに余さず。卷一五、八条に「居甫問。格物工夫、覺見不周給。曰。須是四方八面去格。」とある。

(9) 「千頭萬緒」千變万化の様相を示すもの。種々のもの。ありとあらゆる情況。「語類」卷六、五一条、董銖録(1105)「人只是此仁義禮智四種心。如春夏秋冬、千頭萬緒、只是此四種心發出來。」

(10) 「無有毫髮窒礙」「窒礙」は、滞り、行き詰まり、疑難。「語類」卷一一、五九条、萬人傑録(1185)「看文字、不可落於偏僻。須是周匝。看得四通八達、無些窒礙、方有進益。」同、七六条、葉賀孫録(1186)「某向時與朋友說讀書、也教他去思索、求所疑。近方見得、讀書只是且恁地說心就上面熟讀、久之自有所得、亦自有疑處。蓋熟讀後、自有窒礙不通處、是自然有疑、方好較量。今若先去尋箇疑、便不得。」

(11) 「孟子所謂知皆擴而充之」云々「孟子」「公孫丑」上「凡有四

端於我者、知皆擴而充之矣。若火之始然、泉之始達。苟能充之、足以保四海。苟不充之、不足以事父母。」

54条

致知、則理在物而推吾之知以知之也。知至、則理在物而吾心之知已得其極也。

或問。理之表裏精粗、無不盡、而吾心之分別取舍、無不切。既有箇定理、如何又有表裏精粗。

曰。理固自有表裏精粗、人見得亦自有高低淺深。有人只理會得下面許多、都不見得上面一截。這喚做知得表、知得粗。又有人合下便看得大體、都不就中間細下工夫。這喚做知得裏、知得精。二者都是偏。故大學必欲格物致知。到物格知至、則表裏精粗、無不盡。賀孫

〔校勘〕

○「既有箇定理」朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「人見得亦自有高低淺深」朝鮮古写本は「淺深」を「深淺」に作る。

〔訳〕

(先生がおっしゃった)「致知とは、理が物にあつて、吾が知を推しきわめてその理を知ることである。知至るとは、理が物にあつて、吾が心の知が(窮理の結果)その極致を得ることである。」

ある者がお尋ねした。「(伝五章に)「理の表裏精粗にわたって尽く

さないとすることはなく、吾が心における分別取舍には適切でないものはない。」とあります。既に一個の定理がある以上、どうしてその上、更に表裏精粗があるのでしようか。」

先生「理には本より表裏精粗が有り、人の（理に対する）認識にも自ずと高低浅深が有る。ある人は、ただ下面の多くの道理に取り組みだけで、その一層上の一面を全く認識しない。こういうのを「表を知る」「粗を知る」と称するのだ。またある人は、いきなり大綱を把握しはするが、そこに至るまでのところでの事細かな実践が全くない。こういうのを「裏を知る」「精を知る」と称するのだ。この両者にはどちらにも偏りが有る。それ故に『大学』は必ず格物致知の実践を要請するのだ。（格物致知の実践の結果）物格り知至る段になると、表裏精粗にわたって尽くさないとはいえないのだ。葉賀孫録

〔注〕

（1）「致知」『大学章句』経、朱注「致、推極也。知、猶識也。推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」

（2）「知至」『大学章句』経、朱注「知至者、吾心之所知無不盡也。」

（3）「理之表裏精粗」云々 現行の『大学章句』伝五章は「至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗、無不到、而吾心之全體大用、無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。」に作るが、本条及び以下の資料に徴すれば、『大学章句』の未定稿段階では「理之表裏精粗無不盡、而吾心之分別取舍無不切」に作っていた可能性が有る。『朱文公文集』巻五〇「答周舜弼」第一〇書所引周諱（字

舜弼）語「補亡之章謂、用力之久而一旦廓然貫通焉、則理之表裏精粗、無不盡、而心之分別取舍、無不切。」『語類』本卷、五九条、陳淳録「周問。大學補亡、心之分別取舍、無不切。」なお卷一五、一五一條、葉賀孫録にも「或問。格物致知、到貫通處、方能分別取舍。」云々とある。

『大学章句』序は淳熙十六年己酉（一一八九、朱熹六十歳）二月甲子の紀年を持つが、周知の通り朱熹は死の直前に至まで『大学章句』の改訂に取り組み続けた（王懋竑『朱子年譜』慶元六年庚申、七十一歳「三月辛酉、改大學誠意章。甲子、先生卒。」。今日に伝わる『四書集注』の源流を為すのは淳祐系統本（淳祐年間一一二四一〜一二五二の刊本、及びその系統のテキスト）と興国本（当時、興国軍治下で刊行されたテキスト）の二本であるが、そのいずれもが晩年絶筆に近いテキストと考えられている。因みに呉志忠校訂本（台湾芸文印書館印行本、中華書局新編諸子集成本、等）は淳祐系統本を、四書大本は興国本を、それぞれ底本とする（以上、『四書集注』のテキスト問題については、佐野公治『四書学史の研究』第四章の一「章句集注のテキストについて」を参照、創文社、一九八八年）。

因みに今日の通行本との異同を示す上記諸資料に関して、陳淳の所聞は紹熙元年庚戌（一一九〇）及び慶元五年己未（一一九九）、葉賀孫所聞は紹熙二年辛亥（一一九二）以降（師事期間は全四次）、そして「答周舜弼」第一〇書は慶元三年丁巳（一一九七）に繫年されている（以上、田中謙二「朱門弟子師事年攷」頁一三四頁、

二一九頁、陳来『朱子書信編年考証 増訂本』四三六頁)。ただし、これらの発言において陳淳・葉賀孫・周謨が、発言当時における最新の改訂本に拠っていたとは限らないので、仮に上記異同がある段階における未定稿の内容を今日に伝えるものであるとしても、その具体的時期までは特定し難いということになる。

なお卷一四、八六条、徐寓録「問。大學注言、其體虛靈而不昧、其用鑒照而不遺。此二句是說心、說德。」云々の末尾に「按注是舊本」との黎靖徳校語が有り、これも草稿段階の『大学章句』の一端を示す資料である。『大学章句』の異同に関しては、吉原文昭『南宋学研究』所収「大学章句研究——その改訂の跡附を中心として」を参照(研文社、二〇〇二年)。

(4)「既有箇定理」『大学或問』「知止云者、物格知至、而於天下之事、皆有以知其至善之所在。是則吾所當止之地也。能知所止、則方寸之間、事事物物皆有定理矣。」

(5)「理固有表裏精粗」「固自」は、もともと、もとより。「本自(もともと)」「已自(すでに)」「都自(全て)」等と同様、「自」は単に二音節にするために添えられたもの。三浦國雄『朱子語類』抄』七一頁、九六頁。

(6)「下面許多」「上面一截」「下面」は個別具体的な局面。「上面」はより抽象度の高い局面。「一截」は一層。なお本条の内容は以下のように整理できる。

表・粗——下面許多——細下工夫(所当然之則)
裏・精——上面一截——大體 (所以然之姑)

(7)「這喚做知得表」「喚」は、呼ぶ、称する。

55条

問表裏精粗。曰。須是表裏精粗、無不到。有一種人、只就皮殼上做工夫、却於理之所以然者、全無是處。又有一種人、思慮向裏去、又嫌眼前道理粗、於事物上都不理會。此乃談玄說妙之病、其流必入於異端。 銖

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一六は本条を収録しない。

○「問表裏精粗」成化本、朝鮮整版本は「問」を「或問」に作り、万曆本、和刻本は「問」の上に一字分の空格が有る。なお呂留良本、伝経堂本は底本と同じく「問」に作る。

○「只就皮殼上做工夫」成化本は「上」字の第一画と第二画を欠く。

○朝鮮整版本卷末「考異」に「殼上 上一作二」
○「却於理之所以然者全無是處」朝鮮整版本卷末「考異」「是處。是、大學小註作見」なお〔参考〕を参照のこと。

○「思慮向裏去」万曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

〔訳〕

表裏精粗についてお尋ねした。先生「是非とも「表裏精粗にわたって到らぬところはない」というようにすべきだ。ある種の人たちは、単に皮殻(=表皮・表面)のところで工夫を行うのみで、理の然る所

以に關しては、全く正しいところがない。またある種の人たちは、思慮が裏面にのみ向い、加えて眼前の（個別具体的な）道理が粗雑煩瑣であることを嫌い、事物に即して取り組もうとは全くしない。これこそは、玄を談じ妙を説く、という病弊に他ならないのであって、そのいきつところ、必ずや異端に陥ってしまうであろう。董銖録

〔注〕

(1) 「表裏精粗」 本条の内容は、以下のように整理できる。

表・粗——皮殼上——眼前道理 (所当然之則)
裏・精——向裏——理之所以然 (所以然之姑)

(2) 「談玄說妙之病」「玄妙」は『老子』第一章「玄之又玄、衆妙之門。」等に典拠を持つ語。「談玄說妙」とは、「玄妙」に關する以下の用例に徴すれば、眼前の日常卑近な事柄や六經に記された聖賢の言語を差し置いて、新奇高遠を追求する態度を指す。『語類』卷一〇一、七六条、董銖録(Ⅶ 258)「某舊見李先生時、説得無限道理、也會去學禪。李先生云。汝恁地懸空理會得許多、而面前事、却又理會不得。道亦無玄妙、只在日用間、著實做工夫處理會、便自見得。」同、卷一〇四、一四條、訓葉賀孫(Ⅶ 278)「前日得公書、備悉雅意。聖賢見成事迹、一一可考而行。今日之來、若捨六經之外、求所謂玄妙之說、則無之。近世儒者、不將聖賢言語爲切己之事、必於上面求新奇可喜之論、屈曲纏繞、詭秘變怪。不知聖賢之心、本不如此。」同、卷一一八、四八條、訓周明作(Ⅶ 280)「據某看、學問之道、只是眼前日用底、便是。初無深遠玄妙。」なお「談玄說妙」

に類似する表現として、「說高說妙」(『語類』卷八、八九條、廖謙録、I 140)、「說玄說妙」(卷一〇一、二〇條、吳必大録、Ⅶ 259)、「談虛說妙」(卷一一二、二九條、廖謙録、Ⅶ 287)、「說空說妙」(卷一一一、八〇條、廖謙録、Ⅶ 290)等がある。

(3) 「其流必入於異端」『朱文公文集』卷四六「答黃商伯」第四書所引黃灝(字商伯)語「豈非學者不能居敬以持養、格物以致知、專務反求於心、迫急危殆、無科級依據、或流入於異端。」なお「異端」は、『論語』「為政」「子曰。攻乎異端、斯害也已。」等。

〔參考〕

『四書大全』大學或問、伝五章の小注に以下の一条がある。「表者、人物所共由。裏者、吾心所獨得。有人只就皮殼上用工、於理之所以然者、全無見處。有人思慮向裏去多、於事物上、都不理會。此乃說玄說妙之病。二者都是偏。若到物格知至、則表裏精粗無不盡。」

56 条

問表裏。曰。表者、人物之所共由。裏者、吾心之所獨得。表者、如父慈子孝、雖九夷八蠻、也出這道理不得。裏者、乃是至隱至微、至親至切、切要處。

因舉子思云。語大、天下莫能載。語小、天下莫能破。

又說裏字云。莫見乎隱、莫顯乎微。此箇道理、不惟一日間、離不得、雖一時間、亦離不得、以至終食之頃、亦離不得。夔孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一六は本条を収録しない。

○「此箇道理」朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

○「以至終食之頃」万曆本、和刻本は「食」を「身」に誤る。

〔訳〕

表裏についてお尋ねした。先生「表とは、人や物が共に依拠すべきところである。裏とは、自己の心において独り、体得しているところである。表とは、例えば父は慈、子は孝の類であつて、たとえ九夷八蛮（≡野蛮な異民族）であつても、それらの道理から逸脱することはできない。裏とは、この上なく隠微（≡心の深奥に関わる事柄）、この上なく親切（身近で切実）にして、切実重要なところに他ならない。」

そこで子思の語を挙げて言われた。「道について）その大きいことを論ずれば、天下もこれを載せることができず、その小さいことを論ずれば、天下もこれを碎くことができぬ。」（『中庸章句』一二章）

さらに「裏」字について言われた。「隠より見^あるるはなく、微より顕^あかなるはなし」（『中庸章句』一章）だ。この道理は、単に一日の間も離れることはできないというだけにはとどまらず、一時の間（≡二時間）であつても、やはり離れることはできず、さらには食事一回分の間でさえ、やはり離れることはできないのだ。 林夔孫録

〔注〕

(1)「人物之所共由」『中庸或問』「大而父子君臣、小而動靜食息、不假人力之爲而莫不各有當然不易之理、所謂道也。是乃天下人物之所共由」『中庸章句』朱注「大本者、天命之性、天下之理皆由此出、道之體也。達道者、循性之謂、天下古今之所共由、道之用也。」『中庸或問』「以其古今人物之所共由、故曰天下之達道。」

(2)「吾心之所獨得」下文において「至隱至微」莫見乎隱、莫顯乎微」が言及されていることから明らかなように、朱熹はここで「独得」の「独」字に、『中庸』における「独」の字義（獨者人所不知而已所獨知之地也）を重ね合わせている。即ちここでの「独得」には、他者にはわからないような自己の心の深奥において体得している、というニュアンスが含まれており、それ故に「裏」の概念規定として援用されるのである。なお以下の用例を参照。『語類』卷六、一七条、程端蒙録（I 101）「道者、人之所共由。德者、己之所獨得。」同、卷三四、四六条、程端蒙録（III 85）「道者、人之所共由。如臣之忠、子之孝、只是統舉理而言。德者、己之所獨得。如能忠、能孝、則是就做處言也。」

(3)「如父慈子孝」『礼記』「礼運」「何謂人義。父慈子孝、兄良弟弟、夫義婦聽、長惠幼順、君仁臣忠、十者、謂之人義。」『春秋左氏傳』隱公三年、伝「君義臣行、父慈子孝、兄愛弟敬、所謂六順也。」『春秋左氏傳』昭公二十六年、伝「君令臣共、父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽、禮也。」『晏子春秋』「外篇」上「君令臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、夫和妻柔、姑慈婦聽、禮之經也。」『管子』「立政九敗解」「使君德臣忠、父慈子孝、兄愛弟敬、禮義章明。」

『大学章句』伝三章「爲人子止於孝。爲人父止於慈。」

(4) 「九夷八蠻」『書經』周書「旅獒」「惟克商、遂通道于九夷八蠻。孔安国伝「四夷慕化、貢其方賄。九八、言非一、皆通道路、無遠不服。」「論語」「衛靈公」「子張問行。子曰。言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。」

(5) 「語大」云々『中庸章句』一二章「君子之道、費而隱。：故君子、語大、天下莫能載焉、語小、天下莫能破焉。」朱注「君子之道、：其大無外、其小無內、可謂費矣。然其理之所以然、則隱而莫之見也。」

(6) 「莫見乎隱」『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。」朱注「隱、暗處也。微、細事也。獨者、人所不知而已所獨知之地也。言幽暗之中、細微之事、跡雖未形、而幾則已動。人雖不知而已獨知之、則是天下之事、無有著見明顯而過於此者。是以君子既常戒懼、而於此尤加謹焉。所以遏人欲於將萌、而不使其潛滋暗長於隱微之中、以至離道之遠也。」

(7) 「終食之頃」『論語』「里仁」「君子無終食之間違仁。」朱注「終食者、一飯之頃。」

(8) 「離不得」一瞬たりとも道理から離れるべきではない、という発想に因しては以下を参照。『中庸章句』一章「道也者、不可須臾離也。可離非道也。」

57条

傳問表裏之說。曰。所說博我以文、約我以禮、便是。博我以文、是要四方八面都見得周匝無遺、是之謂表。至於約我以禮、又要逼向身己上來、無一毫之不盡、是之謂裏。

子升云。自古學問、亦不過此二端。曰。是。但須見得通透。木之

〔校勘〕

○朝鮮古写本卷一六は本条を収録しない。

○「無一毫之不盡」成化本は「毫」を「豪」に作る。

〔訳〕

傳が表裏の說についてお尋ねした。先生「所謂「我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす」が、これに当たる。「我を博むるに文を以てす」とは、四方八面の全てにわたって遍く把握して遺漏がないようにすることであつて、このことを「表」と言う。「我を約するに禮を以てす」の方はと言えば、これも自己の身に肉薄接近し、毫も尽くさぬところがないようにする、これを「裏」と言う。

子升が言う。「古来の学問も、この二端（博文・表と約礼・裏）に他なりませんね。」先生「そうだ。ただし是非ともそのところに認識が透徹しなければならぬ。」 錢木之録

〔注〕

(1) 「傳問」傳は未詳。傳姓の門人は複数存在するので（『朱子門人』

頁二二八以下)、特定し難い。なお卷一五、二四条、林夔孫録(一
286)も「傳問」で始まる。

(2)「博我以文、約我以禮」『論語』「子罕」「夫子循循然善誘人。博
我以文、約我以禮、欲罷不能。」朱注「循循、有次序貌。誘、引進也。
博文約禮、教之序也。言夫子道雖高妙而教人有序也。」なお『論語』
中の類似の表現として以下が有る。「雍也」「子曰。君子博學於文、
約之以禮。」「顔淵」「子曰。博學於文、約之以禮。」

(3)「四方八面」あらゆる方面にわたって、つぶさに余さず。
五三条に既出。

(4)「至於約我以禮：是之謂裏」「禮、理也」「禮、履也」は常訓で
あるが、ここでは「禮」と「裏」の音通が意識されていた可能性
がある。因みに「禮」は上声八齊、「理」「履」「裏」はともに上
声四紙(ともに平水韻)。

(5)「逼向身已上」「逼向」は、迫り向かう。「逼向身已上」とは、
我が身に肉薄接近するとの意。五一条に「裏便是就自家身上至親
至切、至隱至密、貼骨貼肉處。」とあるように、自己の骨肉骨髓
に徹する如くに親切切実に取り組め、ということ。

(6)「子升云」子升は未詳。卷一四、一四六条、錢木之録(一276)と同、
一六三条、錢木之録(一286)はいずれも「子升問」で始まっており、
かつ朝鮮古写本は両条とも「子升」を「子升兄」に作っているので、
子升は錢木之(字子山)の兄、もしくは同族同輩行の人物である
可能性もある。

『朱子語類』卷一六(1~57条)、訳注担当者

1~10条	古勝亮
11~22条	福谷彬
23~39条	焦堃
40~50条	宇佐美文理
51~57条	中純夫

(二〇一三年九月二十七日受理)

(うさみ ぶんり 京都大学大学院文学研究科教授)

(こがち りょう 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(しょう こん 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(なか すみお 京都府立大学文学部教授)

(ふくたに あきら 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)